

## 民俗学における周圏論の成立過程

——言語地図から民俗地図へ——

安 室 知

YASUMURO Satoru

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授

【要旨】 学史的にみて周圏論と民俗地図とはその発想のごく早い段階から密接な関係にある。周圏論を展開する上で民俗地図はなくてはならない方法であったし、かつ日本で初めて作られた本格的な民俗地図は周圏論のためのものであったからである。周圏論がさまざまに試行錯誤され成立に至るプロセスは、同時に民俗地図が方法論として洗練されてゆく過程でもある。

民俗学において周圏論はいかなる経緯でどのようなかたちをもって提示されるに至ったのか、発想の原点からその系譜をたどる。それと同時に、民俗地図が成立するプロセスについても周圏論との関係から明らかにすることが、本稿の目的となる。それはいってみれば、1930年代、日本において民俗学が近代学問として成立するプロセスを追うこと、つまり現代民俗学の立脚点を探ることでもある。

具体的には、周圏論が提起されるに至るプロセスを、おもに言語学の研究動向と重ね合わせながら時系列に検討してゆくとともに、周圏論を柳田国男に発想させた場として沖縄とヨーロッパに注目する。

その結果、柳田の周圏論は、ヨハネス・シュミットの言語学理論「Wave Theory」をもとに沖縄において発想されたものであり、それがヨーロッパ滞在時に会った言語地理学の影響を受けることで、民俗学理論として打ち立てられたものであることがわかった。

また、その過程で、柳田は民俗地図を有効な方法として用いていた。日本で初めて描かれた民俗地図は周圏論を示すためのものであったといえる。つまり、民俗地図については、民俗学理論として声高に主張することはなかったが、周圏論とともに方法論として見いだされたものであるといえてよい。

### The Formation Process of the Periphery Propagation Theory, or *Shuken-ron*, in Folklore Studies: From Linguistic Maps to Folk Culture Maps

**Abstract :** In terms of the history of folklore studies, the periphery propagation theory (*shuken-ron*) and folk culture maps have been closely related to each other from the very early stages of their inception. This is because folk culture maps were an essential means for developing *shuken-ron*, and the first fully fledged folk culture map in Japan was created for *shuken-ron*. The process through which *shuken-ron* was established after various trials and errors is also the process of how folk culture maps were refined as a methodology.

This paper traces the origins and development of *shuken-ron* in folklore studies—how it came to be presented and in what form. At the same time, the objective is to also clarify the process of

how folk culture maps were established from their relationship with *shuken-ron*. This can also be described as following the process of how folklore studies became established as a modern science in Japan in the 1930s. In other words, it is also related to exploring the source of modern folklore studies.

To be specific, this paper examines the process of how *shuken-ron* was presented in chronological order, primarily in relation to the research trend of linguistics, while also focusing on Okinawa and Europe as places that inspired Kunio Yanagita to formulate his theory of *shuken-ron*.

As a result, it was found that Yanagita had conceived the idea of *shuken-ron* in Okinawa, based on the linguistic wave theory suggested by Johannes Schmidt, and that he had established this as a folkloristic theory after being influenced by linguistic geography, which he had encountered in Europe.

Furthermore, Yanagita had also used folk culture maps as an effective means in this process. It may be said that the first folk culture map drawn in Japan was designed to represent *shuken-ron*. In other words, folk culture maps may not have been proclaimed as a folkloristic theory, but they can be described as having been created as a methodology with *shuken-ron*.

## 目 次

### はじめに

- I. 柳田国男と周圏論——問題の所在——
  - (1) 周圏論とはなにか——発想の種——
  - (2) 連動する沖縄とヨーロッパ——柳田国男、1920年代の動静から——
- II. 周圏論の形成過程——「古琉球」と「Wave Theory」——
  - (1) 『古琉球』の与えた影響——伊波普猷と柳田国男——
  - (2) 周圏論と言語学理論——「Wave Theory」をめぐって——
  - (3) 周圏論発想の原点——上田万年と「Wave Theory」——
- III. 周圏論の図化と言語地図——言語地理学と方言区画論をめぐって——
  - (1) 言語地理学との出会い——民俗地図の原点——
  - (2) 言語学との関係——言語地図からの発想——
  - (3) 周圏論と方言区画論批判——方言研究に対する姿勢の違い——
- IV. 言語地図から民俗地図へ——まとめに代えて——
  - (1) 周圏論の定立に向けた第1ステップ——沖縄から日本全国へ——
  - (2) 周圏論の定立に向けた第2ステップ——言語地図から民俗地図へ——

## はじめに

周圏論は、1930年代、民俗学が柳田国男（1875-1962）により近代学問として整備されようとするとき、それを象徴する民俗学オリジナルの理論として提示された。それは学史上重要な意義を持つが、一方で現在では現実の方法論としてはほとんど顧みられることがなくなった。ある意味、周圏論の歴史的推移は民俗学の消長そのものといってよい。

周圏論の成立に関して柳田に大きな影響を与えた言語学者に伊波普猷（1876-1947）と東条操（1884-1966）の二人がいる。しかし、民俗学が方法論を整備し近代学問として出発しようとするとき、柳田は伊波と東条という二人の言語学者についてまったく異なる対応をしている。とくに周圏論をめぐるはその対比は明瞭である。

周圏論を語る上で重要な位置を占める「琉球人」（伊波 1911a）のルーツについて、伊波が日本本土からの大和民族の南下説を採るのに対して、柳田の場合は大和民族は中国江南地方から海上の道を通してまず沖縄に至り、その後北上して日本本土にやってくるという道筋を描いた（柳田 1961）。柳田と伊波とでは、「琉球人」のルーツについて民族的には大和民族ということで一致した意見を持つが、沖縄に至るルートは北上説と南下説とで大きな意見の相違があった。つまり、柳田にとって生涯を通しての関心事であった「海上の道」論からすると相容れない論であった。

しかし、柳田は伊波に対してそのことで強い批判を加えることはなかった。むしろ 1921 年に沖縄を訪れた柳田は伊波を何度も尋ね、さまざまに激励し、研究の進展を促している。また、伊波も柳田の勧めに応じて研究のため東京に居を移している。その関係は伊波が 1947 年に東京で亡くなるまで続くことになる。

それは、一つには柳田にとって伊波と密に接していた 1930 年代の最大の関心事は周圏論をはじめ民俗学オリジナルな方法論の整備とそのことによる民俗学の近代学問としての確立<sup>(1)</sup>にあったが、そのとき伊波の考えは後述のごとく柳田に多くの示唆を与え有益であったからである。とくに周圏論については、その発想の原点が伊波にあったといっても過言ではない。

それに対して、東条の場合は、柳田は東条著の「方言採集手帖」やその成果を重用し、また東条の業績を言語地理学が日本に紹介されるはるか以前からそうした研究をすでにおこなっていた（柳田 1938）と評価する一方、周圏論に関連した言説においては、東条ら言語学者を強く批判し、とくに方言区画論（方言区域論）についてはほぼ全否定に近い論を展開した（柳田 1943b）。

本論ではそうした二人の言語学者との関係を軸に周圏論の成立プロセスをたどってゆくことにする。なお、柳田の周圏論発想に関わるもう一人重要な人物に言語学者の上田万年（1867-1937）がいる。詳しくは本論の中で取り上げるが、上田の場合は学問的に伊波と東条の両者に大きな影響を与えた人物ではあるが、柳田との関わりからすると伊波と東条のように直接的なものは少なく、むしろ伊波と東条を介してその考え方が柳田におよんだと考えられる。

なお、本文中において使用する地域・言語・民族の表記については基本的に柳田国男が当時使用していた用語および概念を尊重している。そのため、現在では適切とはいえないものが含まれていることをあらかじめ断っておく。

## I. 柳田国男と圏論——問題の所在——

学史的にみて圏論と民俗地図とはその発想のごく早い段階から密接な関係にある。圏論を展開する上で民俗地図はなくてはならない方法であったし、かつ日本で初めて作られた本格的な民俗地図は圏論のためのものであったからである。圏論がさまざまに試行錯誤され成立に至るプロセスは、同時に民俗地図が方法論として洗練されてゆく過程でもある。

民俗学において圏論はいかなる経緯でどのようなかたちをもって提示されるに至ったのか、発想の原点からその系譜をたどる。と同時に、民俗地図が成立するプロセスについても圏論との関係から明らかにすることが、本稿の目的となる。それはいってみれば、1930年代、日本において民俗学が近代学問として成立するプロセスを追うこと、つまり現代民俗学の立脚点を探ることとも関係してくる。

具体的には、圏論が提起されるに至るプロセスを、おもに言語学の研究動向と重ね合わせながら時系列に検討してゆくとともに、圏論を柳田国男に発想させた場として沖縄とヨーロッパに注目する。

### (1) 圏論とはなにか——発想の種——

柳田国男は「方言に昔の言葉が残る」(柳田 1934d)という。ただし、中央と地方を対比したとき地方には古い習俗が残存するという、いわば圏論を発想する上でその基礎となる考え方は、とくに柳田が発見したことでもなければ、また近代に特有の思考でもない。それは学問としてというよりは、むしろ人の思考として自然なものであったといつてよい。柳田自身も上記のような発想の例として江戸時代の国学者、本居宣長の随筆『玉勝間』(本居 1812=文化 9)を挙げている(柳田 1935b)。柳田が引用した『玉勝間』の一節では、「すべてゐな中には、いにしへの言のゝこれること多し、殊にとほき国人のいふ言の中には、おもしろきことどもぞまじれる」(七の巻「ふぢなみ」)とし、また「詞のみにあらず、よろづのしわざにも、かたるな中には、いにしへぎまの、みやびたることの、これるたぐひ多し」(八の巻「萩の下葉」)としている。

また、柳田個人に限ってみても、圏論の主体をなす地域差を時代差に読み替えるという発想は、なにも「蝸牛考」を待つまでもなく、1909年に出版された柳田にとって最初の著作となる『後狩詞記』にすでに見いだすことができる。たとえば、柳田は畑の作物を獣害から守るための装置の呼称を例にして以下のようにいう。「山に居れば斯くまでも今に遠いものであらうか。思ふに古今は直立する一の棒では無くて、山地に向けて之を横に寝かしたやうなのが我国のさまである。」〔点線、筆者〕(柳田 1909)。この文章については、国文学者の高藤武馬も注目している(高藤 1983)。

このことは、この時点ですでに、柳田が言葉の違いを例に、山(地方)と平地(中央)という地域差が古今といった時代差に読み替えられるという発想を有していたことを示している。こうした柳田の言を、縦軸に時間、横軸に都鄙の差をとり、「<sup>ひとつ</sup>一の棒」を用いて模式化すると図1ようになる。

図1をみると、地方(山地)にある地点aは中央(平地)に近い地点bよりも古い形の伝承を伝えることになり、反対に地点bはaよりも新しい伝承となることがよくわかる。そのように、地域差と時間差は相関する関係にあることが山から里に斜めに渡した「一の棒」として柳田はイメージし

語)を用いて分布図を描き、そこに自ずと浮かび上がる「遠方の一致」を手がかりに周囲構造を見いだすことで、地域差を時間差に読み替える理論として周囲論を打ち立てた。

柳田の場合、その前提には言語学があったことはいうまでもない。後に詳述するが、柳田にとって  
 ③  
 ④  
 ⑤  
 ⑥  
 ⑦  
 ⑧  
 ⑨  
 ⑩  
 ⑪  
 ⑫  
 ⑬  
 ⑭  
 ⑮  
 ⑯  
 ⑰  
 ⑱  
 ⑲  
 ⑳  
 ㉑  
 ㉒  
 ㉓  
 ㉔  
 ㉕  
 ㉖  
 ㉗  
 ㉘  
 ㉙  
 ㉚  
 ㉛  
 ㉜  
 ㉝  
 ㉞  
 ㉟  
 ㊱  
 ㊲  
 ㊳  
 ㊴  
 ㊵  
 ㊶  
 ㊷  
 ㊸  
 ㊹  
 ㊺  
 ㊻  
 ㊼  
 ㊽  
 ㊾  
 ㊿  
 ㏀  
 ㏁  
 ㏂  
 ㏃  
 ㏄  
 ㏅  
 ㏆  
 ㏇  
 ㏈  
 ㏉  
 ㏊  
 ㏋  
 ㏌  
 ㏍  
 ㏎  
 ㏏  
 ㏐  
 ㏑  
 ㏒  
 ㏓  
 ㏔  
 ㏕  
 ㏖  
 ㏗  
 ㏘  
 ㏙  
 ㏚  
 ㏛  
 ㏜  
 ㏝  
 ㏞  
 ㏟  
 ㏠  
 ㏡  
 ㏢  
 ㏣  
 ㏤  
 ㏥  
 ㏦  
 ㏧  
 ㏨  
 ㏩  
 ㏪  
 ㏫  
 ㏬  
 ㏭  
 ㏮  
 ㏯  
 ㏰  
 ㏱  
 ㏲  
 ㏳  
 ㏴  
 ㏵  
 ㏶  
 ㏷  
 ㏸  
 ㏹  
 ㏺  
 ㏻  
 ㏼  
 ㏽  
 ㏾  
 ㏿  
 㐀  
 㐁  
 㐂  
 㐃  
 㐄  
 㐅  
 㐆  
 㐇  
 㐈  
 㐉  
 㐊  
 㐋  
 㐌  
 㐍  
 㐎  
 㐏  
 㐐  
 㐑  
 㐒  
 㐓  
 㐔  
 㐕  
 㐖  
 㐗  
 㐘  
 㐙  
 㐚  
 㐛  
 㐜  
 㐝  
 㐞  
 㐟  
 㐠  
 㐡  
 㐢  
 㐣  
 㐤  
 㐥  
 㐦  
 㐧  
 㐨  
 㐩  
 㐪  
 㐫  
 㐬  
 㐭  
 㐮  
 㐯  
 㐰  
 㐱  
 㐲  
 㐳  
 㐴  
 㐵  
 㐶  
 㐷  
 㐸  
 㐹  
 㐺  
 㐻  
 㐼  
 㐽  
 㐾  
 㐿  
 㑀  
 㑁  
 㑂  
 㑃  
 㑄  
 㑅  
 㑆  
 㑇  
 㑈  
 㑉  
 㑊  
 㑋  
 㑌  
 㑍  
 㑎  
 㑏  
 㑐  
 㑑  
 㑒  
 㑓  
 㑔  
 㑕  
 㑖  
 㑗  
 㑘  
 㑙  
 㑚  
 㑛  
 㑜  
 㑝  
 㑞  
 㑟  
 㑠  
 㑡  
 㑢  
 㑣  
 㑤  
 㑥  
 㑦  
 㑧  
 㑨  
 㑩  
 㑪  
 㑫  
 㑬  
 㑭  
 㑮  
 㑯  
 㑰  
 㑱  
 㑲  
 㑳  
 㑴  
 㑵  
 㑶  
 㑷  
 㑸  
 㑹  
 㑺  
 㑻  
 㑼  
 㑽  
 㑾  
 㑿  
 㒀  
 㒁  
 㒂  
 㒃  
 㒄  
 㒅  
 㒆  
 㒇  
 㒈  
 㒉  
 㒊  
 㒋  
 㒌  
 㒍  
 㒎  
 㒏  
 㒐  
 㒑  
 㒒  
 㒓  
 㒔  
 㒕  
 㒖  
 㒗  
 㒘  
 㒙  
 㒚  
 㒛  
 㒜  
 㒝  
 㒞  
 㒟  
 㒠  
 㒡  
 㒢  
 㒣  
 㒤  
 㒥  
 㒦  
 㒧  
 㒨  
 㒩  
 㒪  
 㒫  
 㒬  
 㒭  
 㒮  
 㒯  
 㒰  
 㒱  
 㒲  
 㒳  
 㒴  
 㒵  
 㒶  
 㒷  
 㒸  
 㒹  
 㒺  
 㒻  
 㒼  
 㒽  
 㒾  
 㒿  
 㓀  
 㓁  
 㓂  
 㓃  
 㓄  
 㓅  
 㓆  
 㓇  
 㓈  
 㓉  
 㓊  
 㓋  
 㓌  
 㓍  
 㓎  
 㓏  
 㓐  
 㓑  
 㓒  
 㓓  
 㓔  
 㓕  
 㓖  
 㓗  
 㓘  
 㓙  
 㓚  
 㓛  
 㓜  
 㓝  
 㓞  
 㓟  
 㓠  
 㓡  
 㓢  
 㓣  
 㓤  
 㓥  
 㓦  
 㓧  
 㓨  
 㓩  
 㓪  
 㓫  
 㓬  
 㓭  
 㓮  
 㓯  
 㓰  
 㓱  
 㓲  
 㓳  
 㓴  
 㓵  
 㓶  
 㓷  
 㓸  
 㓹  
 㓺  
 㓻  
 㓼  
 㓽  
 㓾  
 㓿  
 㔀  
 㔁  
 㔂  
 㔃  
 㔄  
 㔅  
 㔆  
 㔇  
 㔈  
 㔉  
 㔊  
 㔋  
 㔌  
 㔍  
 㔎  
 㔏  
 㔐  
 㔑  
 㔒  
 㔓  
 㔔  
 㔕  
 㔖  
 㔗  
 㔘  
 㔙  
 㔚  
 㔛  
 㔜  
 㔝  
 㔞  
 㔟  
 㔠  
 㔡  
 㔢  
 㔣  
 㔤  
 㔥  
 㔦  
 㔧  
 㔨  
 㔩  
 㔪  
 㔫  
 㔬  
 㔭  
 㔮  
 㔯  
 㔰  
 㔱  
 㔲  
 㔳  
 㔴  
 㔵  
 㔶  
 㔷  
 㔸  
 㔹  
 㔺  
 㔻  
 㔼  
 㔽  
 㔾  
 㔿  
 㕀  
 㕁  
 㕂  
 㕃  
 㕄  
 㕅  
 㕆  
 㕇  
 㕈  
 㕉  
 㕊  
 㕋  
 㕌  
 㕍  
 㕎  
 㕏  
 㕐  
 㕑  
 㕒  
 㕓  
 㕔  
 㕕  
 㕖  
 㕗  
 㕘  
 㕙  
 㕚  
 㕛  
 㕜  
 㕝  
 㕞  
 㕟  
 㕠  
 㕡  
 㕢  
 㕣  
 㕤  
 㕥  
 㕦  
 㕧  
 㕨  
 㕩  
 㕪  
 㕫  
 㕬  
 㕭  
 㕮  
 㕯  
 㕰  
 㕱  
 㕲  
 㕳  
 㕴  
 㕵  
 㕶  
 㕷  
 㕸  
 㕹  
 㕺  
 㕻  
 㕼  
 㕽  
 㕾  
 㕿  
 㖀  
 㖁  
 㖂  
 㖃  
 㖄  
 㖅  
 㖆  
 㖇  
 㖈  
 㖉  
 㖊  
 㖋  
 㖌  
 㖍  
 㖎

まず周圏論の適用範囲についていえば、事の真偽は別にして、柳田のオリジナリティは以下の3点に集約される。一つが、周圏論の適用範囲を柳田が最初にそれを体感した地である沖縄の内部にとどめることなく日本全体に敷衍させたこと、二つ目に「Wave Theory」が誕生したヨーロッパ大陸とは地政学的にまったく環境を異にするところの南北に列島をなす単一民族国家（と柳田は位置づける）日本に適用させたこと、そして三つ目にその列島全体を京都中心に一元的に捉えることを可能にしたことである。そして周圏論の対象についていえば、それは当初注目した方言（語彙）にとどまらず、民俗事象一般に拡大したことである。

なお、圏論を論じるとき重要な概念に「遠方の一致」(柳田 1935b)<sup>(4)</sup>がある。それを手がかりに圏論は考案されたといっても過言ではない。だからこそその分布を視覚化することのできる民俗地図が重要な意味を持っていたのである。

そして、そこで注意しなくてはならないのは、先の本居宣長の言と同様、「遠方の一致」を柳田は方言（語彙）にだけみていたのではないことである。だからこそ、柳田は周圈論の適用範囲を方言（語彙）にとどめることなく民俗事象一般に拡大しようとしたといつてよい。たとえば、「遠方の一致」の用例としてもっとも古い論考は1927年の「目一つ五郎考」であるが、そこでは伝説の中に「遠方の一致」を見いだしている（柳田 1927b）。また、論考「東北と郷土研究」では「遠方の一致」という用語こそ使っていないが、炭焼長者などの説話や伝説、巫女の信仰習俗といったことを例に挙げながら、東北地方と沖縄には同様の伝承が存在することを指摘している（柳田 1930a）。

そして、この「遠方の一致」として画期となるのが、1935年の『郷土生活の研究法』である。同書ではとくに「遠方の一致」という1節を設け、方言のような言語伝承に限定することなく、さまざまな民俗事象に「南北双方の遠心的事情に、著しい一致のあること」（柳田 1935b）を指摘する。その背景となるのが、柳田が1934年から1937年にかけて全国66か所でおこなった山村調査である。この調査により柳田は「遠く離れて住む同胞国民の、根強く持ち伝えて居た無意識の一致」を方言（語彙）だけでなく「<sup>(5)</sup>信仰や自然観」に見いだしている（柳田 1949）。

また、同節において、「沖縄の発見」がなされ、沖縄で現在（1935年当時）みられる民俗文化（「祭祀の式」「家族組織」「土地制度」「技芸流伝の様式」などを例示）が本土においては歴史的に過

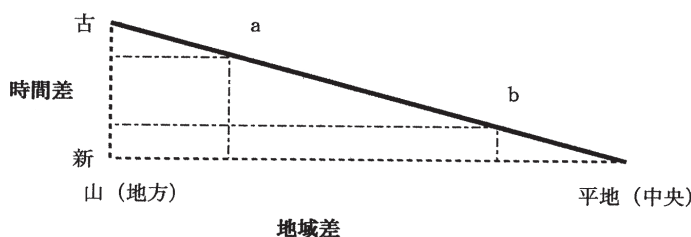


図1 柳田国男における時空間の相關觀念——古今と都鄙の關係——



去に遡って存在していたとする。これにより、沖縄は近畿を中心とした周囲構造のもっとも外縁（辺境）にあり、かつ古態を多く残す民俗の玉手箱として位置づけられた。

このように、「遠方の一致」という現象は、方言（語彙）にとどまらず民俗事象一般に適用可能な民俗学理論として周囲論を位置づけようとするとき重要な要件とされた。柳田が周囲論を論じるとき、「遠方の一致」を掲げた時点で、すでにそれは方言（語彙）だけを対象とするのではなく民俗事象一般への適用を想定するものであったといっていよい。

ただし、柳田の中で周囲論が民俗学理論として完成するのは1935年の『郷土生活の研究法』においてであるが、そのわずか8年後の1943年には『蝸牛考』が改訂され、それにより周囲論の適用範囲は方言（語彙）に限定されるとともに民俗学理論としての看板も下ろされてしまう（安室2018）。こうして柳田の中では、周囲論は民俗学ではなく方言学の理論として位置づけられてしまう。当然、その後は、民俗地図の上で「遠方の一致」が認められても、それを無理して周囲論により解説することはなくなっている。たとえば、1953年に発表された「小正月の来訪者」の分布図では、カセドリの名称が九州（大分県）と東北（岩手県・宮城県）に離れて存在することが指摘されるが、そのことについて周囲論による解説はおこなわれることはなく、むしろ習俗としての違いが強調されている（民俗学研究所編1953）。

## （2） 連動する沖縄とヨーロッパ——柳田国男、1920年代の動静から——

柳田は、1920年8月、東京朝日新聞の客員になることを打診されたとき、旅行させてもらうことを条件にそれを承諾したとされる（定本柳田国男集編纂委員会1971）。そして、同年12月には沖縄・奄美旅行へと旅立っている。明らかに、東京朝日新聞社の客員就任は柳田にとって沖縄・奄美旅行を実現するための手段であったといっていよい。詳しくは後述するが、この沖縄・奄美旅行によって、まだ思いつきにすぎなかった周囲論を実際に身を持って体験する意図があった。しかも、紀行文というかたちではあるが、沖縄・奄美旅行の成果発表も朝日新聞紙上でおこなわれた。

さらに、東京朝日新聞社の客員になることにはもう一つの目論見が柳田にはあったと考えられる。それは、周囲論の発想を実証するため、全国規模のアンケート調査をおこなうことである。朝日新聞の名前を利用して1927年6月にそれは実現された<sup>(6)</sup>。

その意味で、沖縄・奄美旅行とアンケート調査は周囲論の実証のためにはなくてはならない調査活動であり、それは互いに呼応する関係にあったといっていよい。そのとき、その二つの呼応する調査活動を実現するための手段が東京朝日新聞社の客員就任であったといえよう。つまりまだ発想の段階にすぎなかった周囲論を民俗学理論として確実なものにするため、柳田は朝日新聞を利用したことになる。

そうして実現した沖縄・奄美旅行は、国連統治委員としてジュネーブ（スイス）に赴くわずか1か月ほど前に実施されている。しかも、それは2か月半（1920年12月13日から21年3月1日まで）におよぶ長旅であった。その印象はよほど強かったのか、沖縄・奄美旅行から戻るとすぐに「与那国噺（与那国島の女たち）」と「海南小記」<sup>(7)</sup>という2本の論文（紀行文）をジュネーブに赴任するわずか1か月ほどの間に発表している。

柳田はこの2本の論考では尽きぬ沖縄・奄美旅行の思いを胸にヨーロッパへと旅立ったといえる。

それは柳田が一時ヨーロッパから帰国した折、1922年4月に自ら主催して上田万年や伊波普猷、折口信夫、渋沢敬三らとともに南島談話会を組織したことにも表れている。

そして、合計1年7か月（1921年5月9日から1923年11月8日までの2年6か月、ただし途中の1921年12月8日から1922年5月8日まで5か月間は帰国）におよぶヨーロッパ滞在から帰ると、わずか2か月後には第2回、3回の南島談話会を立て続けにおこなう、と同時に沖縄・奄美旅行の体験をもとにした論考を次々に発表し、1925年にはヨーロッパへ行く前にまとめた3本の論考（前記2本と沖縄・奄美旅行の途中に発表している「阿遅摩佐の島」）およびヨーロッパ渡航中に発表されたものと合わせ、『海南小記』と名付けて一本にしている。その冒頭の一文が、「ジュネーブの冬は寂しかった」（柳田1925a）という有名なフレーズで、およそ沖縄・奄美を題材とした論集には似つかわしくないものであった。

それほど、柳田にとってヨーロッパ滞在と、その直前におこなった沖縄・奄美旅行とは関係深いものであったといえてよい。その二つのできごとを結びつけるのが、民俗学方法論として柳田が打ち立てようと目論んでいた周圏論であると筆者は考えている。沖縄・奄美旅行で確信を深めた一つの仮説をヨーロッパでの体験をもとに、民俗学の方法論として洗練させたのがまさに周圏論であった。

以上のように、柳田国男が周圏論を民俗学方法論として定立する過程において、沖縄・奄美旅行の体験とヨーロッパ滞在という二つの連続するできごととは重要な意味を持っていた。前者では、沖縄の文化に肌で触れる機会となったこと、およびそれに加え伊波普猷との出会いが大きな意味を持つ。それに対して、後者では言語地理学をはじめとするヨーロッパにおける最新の研究動向を摂取する機会となった。

沖縄・奄美における体験をもとにしたからこそ、当初「周圏論」という用語に統一されるまでは、「文化波動の法則」（柳田1925c）や「周圏波動の法則」（柳田1928b）という海面に広がる波紋のイメージで呼ばれていたともいえよう。<sup>(8)</sup> その意味で、柳田にとって1921-23年といったごく短い期間に連続した沖縄・奄美とヨーロッパとの出会いがあって初めて周圏論は民俗学理論として明確なかたちを結んだといえよう。

周圏論のイメージが形成される時間的経緯をみてゆくと、まず沖縄・奄美旅行の以前に、沖縄文化のあり方に関心を持ち、その関心事の一つとして周圏論発想の種のようなものがあつた可能性は否定できない。事実、沖縄に行く9年前、1912年に柳田は伊波から『古琉球（初版）』を贈られており（定本柳田国男編編纂会1971）、そこに載る「P音考」や「琉球人の祖先に就いて」の論考を目にしていた可能性は高い。ただ、その関心事は、書物の上でのことであり、柳田自身にとっては机上の発想にすぎなかった。だからこそ、そうした関心事を身をもって体験するために沖縄・奄美旅行を企画したのであり、その意味でそれは旅行と言うよりはフィールド・ワークであった。言い換えるなら、沖縄・奄美旅行は柳田が頭の中にぼんやりと描いていた周圏論のアイデアを確かなものにするための実地調査の機会であつたし、それに続くヨーロッパ赴任は沖縄・奄美の実地調査の成果を思索しつつ、最新の研究動向をもとに周圏論のアイデアを理論化するための機会となった。

詳しくは後述するが、沖縄・奄美旅行中における伊波との密な会談を通して、仮説としての周圏論ができあがっていったと考えられる。それは種がまさにある意思を持って発芽するようなものであつた。そうした周圏論を仮説の段階から、また言語学理論（Wave Theory）の模倣段階から、確たる

民俗学の方法論とすべく強い意志を持って臨んだのがヨーロッパ赴任であったといえよう。その意味で、国際連盟委任統治委員としてヨーロッパ赴任を外務省から打診されたとき「速答シ兼ル事情アリ」（小田 2019）と答えたように、それは柳田が希望したものとはいえなかったかもしれないが、けっして官僚の一職務というような受動的・非主体的なものではなく、柳田のなかには民俗学者としての積極的な意味が見いだされていたといつてよい。むしろこのヨーロッパ赴任が決まっていたからこそ、その直前にわざわざ沖縄・奄美の旅行を企画したし、さらにいえば東京朝日新聞社客員への就任もそのためのものであった可能性さえあると考える。その意味で、沖縄・奄美旅行とヨーロッパ赴任とは溶着した関係にあり、この二つのイベントの間には呼応する意思が働いているといつてよい。

1 年 7 か月におよぶヨーロッパ滞在中には、「南の島の清水」（柳田 1922）、「猪垣の此方」（柳田 1923）といった後に『海南小記』としてまとめられる論考が発表されたり、また帰国後最初の著作が沖縄・奄美の旅行記ともいえる『海南小記』<sup>(9)</sup>であったりしたことにそれはよく表れている。おそらく、ヨーロッパ滞在中の柳田の頭の中には沖縄のことが多くを占めており、それはヨーロッパで得た言語地理学など先端の学問の知識とも連動していた。先に挙げた『海南小記』冒頭のフレーズは、そうした沖縄・奄美旅行とヨーロッパ赴任との関係を象徴している。

## II. 圏論の形成過程——「琉球」と「Wave Theory」——

### (1) 『琉球』の与えた影響——伊波普猷と柳田国男——

伊波普猷は 1912 年、出版してまもない『琉球（初版）』（1911 年刊）を柳田国男に送っている（定本柳田国男集編纂委員会 1971）。その約 10 年後、「南島の学問に目を開いた」（柳田 1935a）と同書を高く評価していた柳田は、沖縄・奄美旅行の冒頭、那覇に上陸するとすぐに当時沖縄県立図書館長の任にあった伊波普猷を訪れている（定本柳田国男集編纂委員会 1971）。1921 年 1 月 5 日のことである。しかも、旅行中、柳田が那覇に滞在した 15 日間（1921 年 1 月 5～16 日、2 月 5～7 日）はほぼ毎日のように図書館を訪ねては伊波とさまざまな話をしたといふ<sup>(10)</sup>（柳田 1962）。

その『琉球』には、柳田が後に提唱することになる圏論と「海上の道」論という日本民俗文化のルーツに関わる二つの学説に大きな影響を与えた論考が掲載されている。

その一つ「琉球人の祖先に就いて」において、伊波は琉球語を日本語の「姉妹語」とした上で以下のように言う。「この音韻変化の運動の中心は勿論近畿地方であつて、漸次地方に伝播したのであるから、中心点をさる遠い地方即ち奥羽九州出雲には今なほ古音が多く保存されている」〔下線、筆者〕（伊波 1911c）。

このとき注目すべきは、「音韻変化の運動」として、日本全体を一元的に捉え、中央と地方の関係を音韻の新旧に対応させたことである。つまり日本の中心に誕生した音韻は時間をかけて周辺へと伝播していくことを繰り返すため、中央から離れた地方にはその距離に応じて古い音韻が見られるとするものである。このとき中心たる近畿から遠く離れた地方として奥羽、九州、出雲の 3 地点が例示されるが、これは中心から放射状に北、南、西の 3 方向を示すもので、その意識の中には円の外周にこの 3 地点が位置すること、つまり圏構造が示唆されていると解釈できる。これは、後に柳田が提起することになる圏論に等しい考え方が方言の音韻を例にしてすでに示唆されているといつてよい。



柳田の語彙に対して、伊波は音韻に注目するという違いはあるものの、その先駆性は評価されなくてはならない。ただし、その実証は論文中ではなされてはいない。<sup>(11)</sup>

そのとき興味深いのは、上記のような指摘をした上で、伊波は「然らば琉球群島の方言はこの問題に対しては如何なる位置に立つのであらう」と自問していることである。それは沖縄が、中心たる近畿からみて「音韻変化の運動」の外周に位置づけられる九州のさらに南方にあるからである。つまり、それは沖縄が「日本」の内にあるのか、外にあるのかを自らに問いかけるものであった。その答えは、やはり同書に収録された論文「P 音考」においてきわめて明確かつ実証性をもって示されている。

伊波は「P 音考」において、首里、国頭、八重山、宮古、大島（奄美）の5地域を横軸に、「葉」「墓」など19の言葉を縦軸にして、その言葉がそれぞれの地域でどのように発音されるかを一覧表にして対比する（伊波 1911b）。なお、この5地点の位置関係を示すと、南から順に、八重山—宮古—首里—国頭—大島（奄美）となる。

伊波は、後述する上田万年の研究をもとに、まず日本語においてH音の発音は時代を遡るとF音になり、さらに遡るとP音となること（P音→F音→H音という時代変遷）を示した上で、次に上記の一覧表をもとに、そうした大和の時代変遷が沖縄においては現在（20世紀初頭）でも地域差としてみられることを指摘する。具体的には、首里（那覇）にはもっとも新しいH音がみられるのに対して、その陸続きに北方（国頭地方）と海伝いに南方（宮古・八重山地方）には時代的に古いP音やF音が分布することを示す。これは、いわば首里を中心として南北に「遠方の一致」が存在することを指摘するものである。

また、そうしたことを「今試にPFH音分布の地図を製して、この島々の歴史的関係と対照して見たら、その変遷の過程が容易く推測される」とする。まさに民俗地図の発想である。ただし伊波は結局のところそれを図化することはなかった。柳田はこうした伊波の論を受けて、1930年に刊行した『蝸牛考（初版）』においては、日本全国にある蝸牛の異称を一覧表にまとめるとともに、より明快な論理とするため図化をはかったものと思われる。それが「蝸牛異称分布図」（柳田 1930b）である。こうしてみると、初めて周圏図を描いたのは柳田ではあったが、その発想はすでに20年も前に南西諸島を舞台に伊波によってなされていたといっていよい。

柳田は沖縄・奄美旅行の途上、伊波に「南島を研究しなければ、日本の古いことがどうしても解けない」（伊波 1922b）と熱く語っているのは、まさに「P 音考」に指摘されていたことを身をもって体験できたことで、日本の古代から近代に至るまでの歴史が沖縄では地域差として把握できるという考えに至ったからであろう。

ここで、もう一度、伊波が先の一覧表から読み取った「遠方の一致」について考えてみる必要がある。伊波は現在の琉球列島に住む人々を九州から南漸してきた大和民族と考えており、そのやってきた当初はみなP音であったとする。その後、琉球では首里を中心として独自の王朝が栄える中、本土からの影響をいち早く受けてPからFへそしてHへと音韻変化していったのが首里であると考えた。

このとき注意すべきは、沖縄においては大きな範囲で大和の影響を受けながら、沖縄独自の文化圏も存在するとしたことである。つまり、後に提起される周圏論を当てはめるなら、近畿を中心とした

汎日本的レベルの大きな波紋の中に沖縄は位置づけられるとともに、沖縄には首里を中心とした小さな周圏論が成立すると伊波は考えていたことになる。「P 音考」に示された琉球列島における音韻変化はまさにそれを示すものであった。

こうした伊波の考えに対して、柳田はどのような態度をとったのであろうか。当初、柳田もその考えに大きな影響を受けており、1925 年の論文「南島研究の現状」では、沖縄の文化を大和とは区別して「沖縄文明」と呼んでいるし、また同論文の一節「言語変遷と世相」においては、沖縄における言語の変遷について、首里を中心に琉球列島の「今尚遠い島の隅々には古い形を遺して居る」とし、それを「文化波動の法則」と呼んでいる（柳田 1925b）。

だからこそ、周圏論によって日本を一元的に捉えようとした 1930 年の『蝸牛考（初版）』では、柳田は沖縄の事例を一覧表（「蝸牛異名索引」）の中に含めておきながら、周圏構造を示す図（「蝸牛異称分布図」）からは沖縄を排除するという矛盾した扱いをせざるをえなかったといえよう（安室 2018）。

柳田が伊波の「P 音考」に影響を受けたであろうことは、1927 年に書いた「蝸牛考（論文）」にも明瞭に示される。奄美大島以南の琉球列島における蝸牛の名称の変化を取り上げ、チンナンとツクラメとの関係を分析するが、そのとき R→D→N という音韻の変化を根拠としている（柳田 1927a）。こうした音韻変化に注目した分析は、他地域ではおこなわれておらず、琉球方言を論じた伊波の「P 音考」を意識しているからこそであると考えられる。

しかし、1930 年『蝸牛考（初版）』になると、R、D、N といった言語学的な表現は改められ、それぞれ、ラ行、ダ行、ナ行と表記されるようになる。しかも、重要なことは、D が N に変化したとする考え方が改められ、単に両者が「通用」する関係にあることだけが示されることである（柳田 1930b）。それは、首里を中心とした小さな周圏構造の見直しであり、柳田の中における「P 音考」からの脱却である。

さらには、1943 年『蝸牛考（改訂版）』では、首里の方言チンナンや加計呂麻島（奄美地域）の方言チンダルが九州宮崎の方言ツングラメからの転訛であるとされ、八重山まではその解釈が難しいとしながらも、これにより九州から奄美、沖縄本島までが一繋がりとなること、つまり近畿を中心とした大きな周圏構造に沖縄が取り込まれることが示された（柳田 1943a）。このことは、一種の矛盾として柳田は意識しながらも、沖縄における独自の文化圏を認めつつ、大和の文化がおよぶ範囲が薩南諸島から沖縄諸島にまで拡大されていったことを示している。

## （2）周圏論と言語学理論——「Wave Theory」をめぐる——

柳田国男が周圏論を唱えだした 1920 年代後半においては、すでに言葉の伝播のあり方として周圏的分布が成り立つことは言語学者の中ではある程度まで知られるものとなっていた。それは 1890 年代後半にはすでにヨハネス・シュミットの「Wave Theory」（原典のドイツ語では「Wellen theorie」）が「Tree Theory」（系統樹説）と比較してより蓋然性が高い理論として東京帝国大学の講義（新村 1975）で取り上げられていたことをみても明らかである。しかし、それはまだ比較言語学上の理論としてヨーロッパ大陸のようなところに適用されるもので、日本のように周りを海に囲まれた列島へ適用できるものとは考えられていない。つまりこの時点ではまだ日本列島にみる「遠方の一致」

と「Wave Theory」の接点は見いだされていない。

柳田が「周圏説」の語を用いた最初は、1927年の「蝸牛考（論文）」である（柳田 1927a）。しかし、それはまだ民俗学理論としての周圏論ではなく、言語学理論「Wave Theory」の援用にすぎなかった。というのも、1920年代後半はまだ民俗学理論としての用語は存在しなかったからである。たとえば、文化伝播のあり方を「静かなる池の汀に、繰返して小石を投込んだ場合のやうに、段々の波紋の輪が、首里那覇の間を中心として逐次に四方に進んで行つた」（柳田 1925c）と形容したり、また「波動圏」「文化波動の法則」（柳田 1925c）や「周圏波動の法則」（柳田 1928b）といったのは、まさに「Wave Theory」の模倣である。

つまり、1920年代後半の時点では、言語学理論としての「Wave Theory」に着目はしていてもまだ民俗学理論として適用可能かどうかを模索している段階であった。それは模倣の段階にとどまっていると見てよく、その意味で理論としての成熟度は低く、福田アジオも指摘するように仮説の提示にすぎない（福田 1984）。

その後、柳田は南北に細長い日本列島上に見られる「遠方の一致」を読み解く方法として周圏論を提起し、それにより地域差を時代差に読み替えることを可能にした。さらには方言（語彙）だけでなく民俗事象一般に当てはめることが可能な理論として周圏論を補強しようとした。その正否はおくとして、この2段階のステップにこそ「Wave Theory」を超える柳田の創意があり、かつ言語学理論から民俗学理論への創造的転換がある。

その2段階のステップを踏むために、まず柳田は1927年に朝日新聞のネットワークを使って全国約1000か所におよぶ大規模な動植物名彙に関するアンケート調査をおこなう。そして、その結果をもとに定量的な分析をおこない、理論としての精緻化を図ろうとした。その成果は1930年の『蝸牛考（初版）』においてまず「蝸牛異称分布図」（243点示）として提示され、さらに1935年には『郷土生活の研究法』によって「遠方の一致」を読み解く民俗学の一般理論として周圏論が示されることになる。<sup>(12)</sup>

また、このように「Wave Theory」を手がかりにすると、柳田がときにあえて「方言周圏論」の語を用いた意図が理解される。さらに興味深いことに、その意図が1930年『蝸牛考（初版）』と1943年の改訂版のときとは大きく異なっていたこともわかってくる。

1930年当時、柳田は意識の上ではまだ周圏論を民俗学の一般理論と宣言するまでには至っておらず、言語学理論の「Wave Theory」を転用したという思いがあったため、あえて「方言」の語を「周圏論」の前に付けたと考えられる。その後1935年の『郷土生活の研究法』によって周圏論の民俗学における一般理論化（語彙だけでなく民俗事象一般への適用と日本全体を視野に入れた理論化という二つのステップを超えること）が成し遂げられると、そこには「方言周圏論」の語は見当たらない。それは言語学理論からの脱却を意味するといえよう。だからこそ「Wave Theory」のような言語学理論を想起させる用語の使用を避けたと考えられる。

しかし、渋沢敬三の魚名研究によりその手法が強く批判される（安室 2016）と、柳田は『蝸牛考』を1943年に改訂し「方言周圏論」の言葉を復活（初版からの踏襲）させることになる。『蝸牛考（改訂版）』の「序」において、柳田は自分にとって『蝸牛考』は民俗学ではなく方言学の業績である（柳田 1943b）とした上で、『郷土生活の研究法』における主張を大きく改め、周圏論を方言研究にの

み適用される理論とした。そのことは1943年の時点で柳田が周圏論をして民俗学の一般理論とすることを諦めたことを物語っている。

### (3) 周圏論発想の原点——上田万年と「Wave Theory」——

柳田国男の中で周圏論が二つのステップを経て民俗学理論として完成をみるのは1935年『郷土生活の研究法』だとすると、そこに至る過程とくに言語学理論の「Wave Theory」を民俗学の周圏論へと創意する上で伊波普猷とその師である上田万年の果たした役割は大きい。柳田が民俗学理論としての周圏論を着想するきっかけを与えたのは伊波（間接的には上田）であり、それをはっきりと意識させた地は伊波の生まれ育った沖縄であった。

柳田が周圏論を発想するにあたって伊波が東京帝国大学に学んだ言語学者であったことは大きな意味を持つ。柳田の中に周圏論のイメージが形成されたのは、「蝸牛考（論文）」執筆以前、具体的には1921年の沖縄・奄美旅行にあったことは前述の通りである。それは「沖縄文明」（柳田 1925c）を意識したものであることは間違いない。そして、その「沖縄文明」は沖縄の言語学者の研究から柳田が見いだしたものであった。

柳田は1925年の論考「南島研究の現状」の中でこう述べている。「伊波氏のP音考といふ論文は、此点に関して至って有力なる参考であって、今や一般に其正当を承認せられて居る。即ち沖縄語に於ても内地語と同じやうに、パ行は今のハ行の元の音であった。さうして我々の方と同じ法則で、中央部から率先してPがFに移り次で又Hに移ったのであった。……（中略）……波動圏の遠くなるにつれて、Fが現れ又Pが顕れて来る。」（下線、筆者）（柳田 1925c）。

これは先にも指摘したように、沖縄方言における音韻の分布が首里を中心としてそこから南北に遠ざかるに従いH→F→Pと変化することをいっている。この「波動圏」とは周圏論を発想する上で起点の一つとなったヨハネス・シュミットの「Wave Theory」からの援用である。また、柳田のいう「此点」とは沖縄での音韻変化と日本全体のそれとが同様の過程をたどるものであること、つまり沖縄のそれは日本全体の縮図として位置づけられることを指している。柳田にとって伊波の論文「P音考」はこうした着想をもたらし根本であるといっていよい。このとき重要なことは、柳田の「蝸牛考（論文）」より20年も前に「P音考」が執筆されていることである。

さらに興味深いことに、伊波が「P音考」を執筆するのは1907年（1911年『古琉球』〔初版〕に掲載）のことであるが、同名タイトルの論考が言語学者上田万年（当時、東京帝国大学教授）によって1898年に書かれていることである。上田の論考ではすでに現在（論文発表当時）の日本語のH音は古文獻上においてP音で発音されていたこと、および現在でも沖縄ではP音が存在することが指摘されている（上田 1898）。

上田は、明治の御雇外国人教師で東京帝国大学教授のバジル・ホール・チェンバレンから言語学を学び、さらに1889年から1894年までの3年7か月間、ヨーロッパ（ドイツ・フランス）に留学している。そして、その間にベルリン大学やライプツヒ大学といった大学において、ハイマン・シュタイントールほか当時第一線の言語学者から指導を受けるとともに、注目すべきことにベルリン大学ではヨハネス・シュミットから直接教えを受けている（柴田 1975）。そうした機会に、最先端の言語学の知見を得るとともに、シュミット著「Die Verwandtschaftsverhältnisse der indogermanischen



Sprachen (インド・ゲルマン諸語の関係)」(1872 年刊) で提唱された「Wave Theory」に接したと考えられる。そして、ヨーロッパからの帰国後、上田はチェンバレンの跡を継いで、東京帝国大学の博言学科(1900 年に言語学科に改称)の教授となる。その後、言語学研究室を創設し、自らが初代の主任となっている。そのように上田は近代日本における言語学の生みの親であるといつてよい。

その上田から伊波は学生として「比較言語学」の講義を受けていた(並松 2010、外間・比屋根 1976)。また、伊波は日琉同祖論に関連して、上田の「P 音考」を参照している(伊波 1904)ことからみても、上田の言語学講義に大きく影響を受けていたことは間違いない。

そうした伊波は大学在学中の 1904 年には論考「琉球群島の単語」を発表し、そこですでに首里・国頭・八重山・宮古・大島(奄美)の 5 地域における詳細な音韻の比較検討をおこなっている。<sup>(15)</sup>上田の考えを踏襲しつつ、論考「琉球群島の単語」を論理的に洗練させたものが「P 音考」である。その結果、先にも指摘したように、伊波は後に柳田が「蝸牛考(論文)」において示したような近畿を中心とした九州・東北に至る大きな圏構造を認めつつ、同時に南西諸島においては首里を中心とする小さな圏構造を発見した。

伊波の「P 音考」のもっとも大きな発見はそこにあり、明らかに柳田の圏論はその言語学上の発見に大きく影響を受けたといつてよい。そのとき注目すべきは、柳田の場合は、方言にみる音韻の変化ではなく、語彙に注目して伊波説を踏襲したことである。柳田による創意の出発点はそこにある。

伊波は上田の「P 音考」をもとに、音韻の歴史的変化を地域差として沖縄方言の中に見いだしたわけだが、そうした音韻変化に関連して伊波は上田からもう一つ重要なことを学んでいる。それは、後に柳田の圏論発想の原点となるシュミットの「Wave Theory」についてである。

<sup>(16)</sup>新村出が筆録した 1896・1897(明治 29・30) 年当時の上田の講義ノートを見ると、「Wave Theory」を「波状説」と翻訳し、かつ同心円構造を持った圏図(図 2)として描写している。その上で、「time ノ相異」は「東西南北ニ散リユクニ時代ノ差」(新村 1975:p 166)とし、例として中心(O.H: original stock of Aryan)から離れるほど古くに伝播したものであることを示している(同:p 62)。

本来シュミットの「Wave Theory」は比較言語学の中で唱えられた言語の接触と分化に関する理論であり、中心から離れるほど古態を遺していることをことさらに主張するものではない。むしろ、

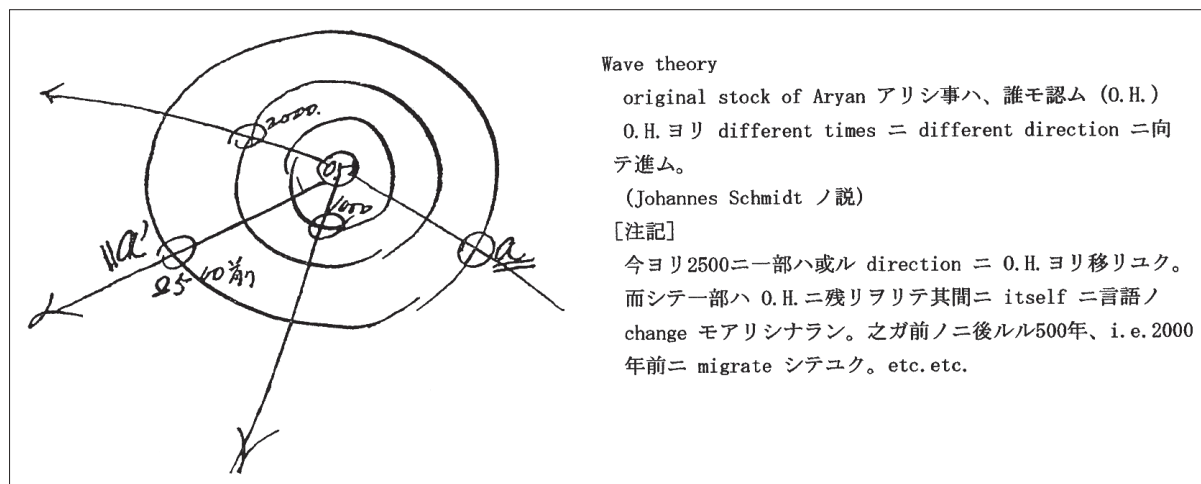


図 2 上田万年が描く「Wave Theory」——新村出筆録「講義ノート」より——

出典：(新村 1975)



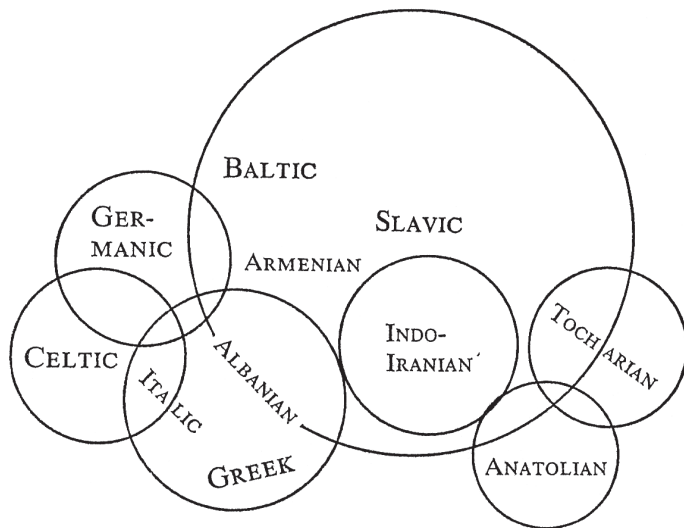


図3 ヨハネス・シュミットによる「Wave Theory」の図——インド・ヨーロッパ系言語の分布をもとに再構成したもの——

出典：(Lehaman 1962)

中心から遠く伝播したもののほど他の言語との接触は大きくなり、結果として変容の度合いも高くなるとする（松並ほか1983）。つまり、柳田の周圏論とは異なり、周辺に行くほど新しいものとなる。

また、上田の講義録に残された「Wave Theory」の説明とそれを模式化した図は、シュミットが意図した波状伝播図（図3）（Lehmann 1962）とは大きく異なるものであることに注意すべきである。上田の講義録に残された「Wave Theory」の説明と図は、

O. H を中心に等語線が同心円状に描かれ、かつ O. H から遠い円ほど古くに伝わったものであることが明示される。それは同じ円弧を用いたものではあっても、シュミットのそれとは異なり、いわば上田流の解釈が施されたものであるといつてよい。

柳田の周圏論では文化は中央に発しそれが時間とともに周辺に伝播するため古い文化ほど外側に残るというもので結果的に文化の新旧により同心円構造をなすことになるが、それは上田の紹介する「Wave Theory」とほとんど同じ発想といえる。このことは、柳田が直接的にシュミットを参考にしたのではなく、言語学者の上田と伊波を介して自身の周圏論に「Wave Theory」を取り込んだことを如実に物語っている。そう考えるなら、柳田の周圏論とシュミットの「Wave Theory」とでは中心から離れた周縁部の位置づけが新旧で真逆になっていることについての説明がつく。

またさらにいうと、柳田にとって「Wave Theory」との出会いが、伊波という沖縄の生んだ言語学者を介したこと、つまりは沖縄を舞台にしたものであったことの意味は大きい。「おもろさうし」の校訂事業への援助を依頼するなど上田とも直接交流（定本柳田国男集編纂委員会1971）のあった柳田は、伊波やその著作『古琉球』と出会う前から知識として「Wave Theory」ないし「波動説」を知っていた可能性はないとはいえないが、沖縄・奄美旅行があったらからこそ、その有効性を「沖縄文明」の中で身をもって体感できたといつてよい。柳田にとっては、周圏論を生み出すにあたって沖縄・奄美旅行はまさに体験と理論を一致させることができる唯一の機会であった。

その意味で、そうした実感を伴うものであったからこそ、その理論を後に京都を中心にして日本列島全域に当てはめることができたといえる。「沖縄文明」を理解するための理論から日本全体に適用可能な理論へと敷衍されたのが1920年代、つまり沖縄・奄美旅行の直後に発表された「海南小記」（1921年）から「蝸牛考（論文）」（1927年）にかけての頃であったといつてよからう。そして、その過程でなされたヨーロッパ赴任（1921-23）は、直接的に言語地理学の先端的動向に接することができた点で、柳田にとっては後に提唱される周圏論の構想をより確固たるものにするため大きな意味を持ってくるのである。

なお、以下では「Wave Theory」といった場合にはシュミットの学説を、「波動説」といった場合

には上田の翻案した「Wave Theory」を示すこととする。

### Ⅲ. 圏論の図化と言語地図——言語地理学と方言区画論をめぐって——

#### (1) 言語地理学との出会い——民俗地図の原点——

圏論を展開する上で大きな役割を果たしたのが民俗地図である。地図上に民俗分布を描くことにより、圏論はより明解な論理を提示することができた。

その民俗地図にとって大きな影響を与えたのが言語地理学であった。ただし、柳田の場合はヨーロッパ赴任以前にすでに民俗地図の発想を伊波普猷の『古琉球』（とくに「P 音考」）や国語調査委員会の『音韻分布図』（1905 年）・『口語法分布図』（1906 年）から得ており、ヨーロッパ赴任のときに受けた言語地理学の影響は柳田のそれを洗練させるためのものであったと位置づけられる。その意味では、柳田は日本においていち早く言語学により導入されていた言語地理学の知見を伊波ら言語学者から取り込むとともに、ヨーロッパにおいては日本の言語学というフィルターを通すことなく当時最先端の言語地理学の手法を自身の圏論の中に摂取していたといえる。

柳田国男にとってヨーロッパ滞在は、提起されて間もない言語地理学の研究動向に直接触れる重要な機会となっていた。例えば、柳田はジュネーブ大学において E・ピタル教授による人類学の講義を聴講し、そこでアルベール・ドーザの『言語地理学』（1922 年フランスにて出版）を読んだとされる（柴田 1980・後藤 1996）。

ヨーロッパからの帰国後 1929 年に書かれた論文「シンガラ考」（柳田 1929）には、「仏蘭西の近頃の方言学者たち」の動向として「le principe de la continuité des aires」を挙げ、それに「方言領域連続の法則」という訳語を与えている。「continuité des aires」の文言はドーザ『言語地理学』の中にも確認（ドーザ 1922：p 44）され、後に「地区連続の原則」と訳されていることから、柳田のいう「仏蘭西の近頃の方言学者たち」の動向はドーザの『言語地理学』から得ていたものであることはほぼ間違いなからう。

もう少し具体的に同書の内容を見てゆく。同書はまさに柳田がジュネーブに滞在中の 1922 年に刊行されたもので、最先端の言語地理学を伝える書となった。同書によれば、言語地理学を学問として打ち立てるきっかけとなった最初にして最大の業績はフランスの言語学者ジュール・ジリエロンが編纂した『フランス言語地図（Atlas Linguistique de la France）』にあるとされる（同：p 17）。『フランス言語地図』はフランス国内 639 地点において調査された 1920 項目におよぶ俚語（語彙、音韻、形態、統辞など）についてその分布状況をまとめたもので、約 2000 枚の地図を集成しており、1902 年から 1910 年にかけて計 35 巻が刊行されている（同：p 5）。ジリエロンをして言語地理学の生みの親とするにふさわしい業績である（松原 1958）。

この『フランス言語地図』を基本的な参考文献とし、かつその理論的解説のために書かれたといえるドーザの『言語地理学』には、「フランスにおける牝馬の諸名称」の分布図ほか 8 点の言語地図が掲載されている。また、その一節には「放射と波動の中心地」の章が設けられ、そこには柳田の圏論に関わるものとして「言語放射」（rayonnement）や「伝播原点」（grands centres d'expansion）といった概念が提示されている。同書によると、「語と形態は、放射的に伝播するもので、伝播原点

の周囲に拡がって行く」(同：p 200)とし、「社会的中心地はみな各々言語放射原点である」(同：p 222)とされる。そうした記述をみると、1900年代初頭にはシュミットによる「Wave Theory」が言語伝播のあり方として広く一般的に受用されていたことが理解される。

また、同書により柳田の考えが明確化されたことの一つに、中央において文化が創造されるという考え方がある。とくに語彙に関してはその革新は中央で起こるため、そこが「文化の大中心地」であり「創造の中心点」になるとする(同：p 48)。その結果、中心から離れた地方に「古い語と語形態」が存在する。前述のごとく、柳田はヨーロッパで言語地理学に出会うより先にすでに上記のような考えを持っていたことは確かであるが、圏論を民俗学における一般理論としようとするときには、当時最先端であった言語地理学からの援用は大きな意味があったといえる。

以上のように、柳田にとってヨーロッパ滞在はまさに最先端の言語地理学との出会いのときであった。柳田にとっては、圏論発想の第1の起点が沖縄および伊波との出会いにあったとするなら、ヨーロッパにおける言語地理学との出会いはまさに第2の起点といえる。

柳田はヨーロッパから帰国した4年後、1927年に「蝸牛考(論文)」を発表するとともに、それに満足することなく蝸牛など動植物名と挨拶文に関する全国規模のアンケート調査をおこなっている。このアンケートは全国約1000か所に送付しておこなわれたが、その意図は圏論の発想をより確実なものとするための定量的な分析にあった。この調査は、アンケートという調査法としての質の問題(東条1950)はあるものの、分布図を描くとき重要な要素となる調査地点数の上では、『フランス言語地図』を上回るものとなっている(回答数約600は『フランス言語地図』に匹敵)。その意味で、柳田のアンケート調査は明らかに『フランス言語地図』に触発され、対抗する意識を持っておこなわれたものと考えてよさそう。こうした時期的・規模的な符合は、柳田にとってヨーロッパ滞時のフランス言語地理学との出会いが圏論を民俗学理論として確たるものにする経緯として重要な意味を持っていたことを物語っている。また、それは圏論の論理展開において分布図が重要な役目を果たすことを柳田に改めて認識させたといえる。

こうして言語地理学に焦点を当て学史的に検討してみると、圏論の定立過程には1927年「蝸牛考(論文)」と1930年『蝸牛考(初版)』との間に大きな段差があることが理解されよう。ひと言でいえば、「蝸牛考(論文)」までは前述のごとく「圏論」という用語に統一されておらず、かつその内容も「Wave Theory」(または上田によるその翻案である「波動説」)の模倣段階にあったといえる。これに対して、『蝸牛考(初版)』には全国規模のアンケート調査で得た多数の資料(「蝸牛異名索引」とそれをもとにして作成された民俗地図(「蝸牛異称分布図」))が掲載されており、またこの後は用語も「圏論」(方言圏論)に統一されている。つまり、1930年の『蝸牛考(初版)』をもって圏論は言語学理論の模倣を脱し民俗学理論としての第一歩を記したといえる。

そのとき、両書のちょうど中間となる1929年に書かれた論考「シンガラ考」は、言語学理論の模倣から民俗学理論へという大きな段差を、柳田がいかに乗り越えたかを理解する上で重要である。この論考において、柳田はフランスの言語地理学の動向について言及していることは前述の通りであるが、研究史上において位層の異なる「蝸牛考(論文)」と『蝸牛考(初版)』という2書の間に、わざわざフランスの研究動向に触れる「シンガラ考」が書かれたわけで、そうしたことからヨーロッパの言語地理学が圏論を次なる位相に押し上げる上で大きな意味を持っていたことがうかがわれる。

具体的には、この論文の中で、柳田は「一つの言葉物言ひには大か小か、元は必ず一続きの使用区域があったのである。それが中切れて遠くに飛んで居るといふことは、主として其中間に新しい次の語が現はれて、今まで在ったものを罷めさせた結果と見てよいのである。」(柳田 1929) というが、それは後に言語学において ABA 分布と名付けられる考え方であり、そうした図の読み方はまさに周圏論であるといつてよい。

「元は一続きの使用区域」があったものが「中切れて遠くに飛んで居る」ように分布していると解されるのは、柳田がそれを南北に細長い日本列島に当てはめているからである。「一続きの使用区域」には、本来陸地（人家の分布地）なら分布するはずのところが海となっているため、そこが欠損部となり、結果的に列島の南端と北端といった遠く離れたところに同一の文化が分布すること、つまり「遠方の一致」が見いだされることになる。

そして、「南北各地の方言が追々に比較せられるにおよんで、所謂方言区域の説は自然に方言圏のそれに代らざるを得ぬ」というのであるが、もちろん「方言圏」とは方言の中心からの広がり方を圏として捉えること、つまりは中心から等距離にあるところを圏内にすればそれは周圏論ということになる。この「方言圏」こそシュミットの「Wave Theory」を翻案した上田万年の「波動説」の考え方と重なり、方言（語彙）の分布を分ける境界線（圏域を示す線）が等語線ということになる。つまり、中心点を同じくして、発生時期の異なる複数の方言圏を重ねて表示したものが周圏図ということになる。

以上のように、ヨーロッパ言語地理学で得た知見は、その後言語学でなされる ABA 分布の考え方を先取りしていることに代表されるように、周圏論において模倣から創意へと進むとき、柳田の考え方がどのように洗練されていったかがよくわかる。

その後も、柳田にとってヨーロッパ生まれの新しい研究手法として言語地理学（柳田 1938）へ寄せる期待は大きなものがあった。たとえば、「南佐久郡方言集」（柳田 1931）や「宝島方言集」（柳田 1932）といった 1930 年代の初頭に次々に刊行されている地域方言集に関連して、「将来の言語地理学者に、遥かなる声援を送って置かうと思ふ」（柳田 1931）といい、日本各地の方言集が集積されつつあるなか言語地理学への期待が語られる。1930 年『蝸牛考（初版）』の刊行以降、その気運はより高まったといつてよい。

さらにいうと、柳田はこうした地域ごとの方言集がその後に統合されて日本全体を視野に入れた「国語」の研究になるべきであると考えており、そのときの分析手法として言語地理学が重要な役目を果たすと考えていた（柳田 1934a・1934d）。そうした地域方言集の統合により、自身のおこなったアンケート調査を超え、『フランス言語地図』にも匹敵する規模と質をもった言語地図を柳田は夢想していたといつてよい（柳田 年不詳）。

一方で、柳田は「言語地理学の知識で言語が解釈出来ると考へてゐるのは不可ない」（柳田 1934c）といい、民俗学による方言研究の必要性和とともに、その無分別な援用を戒めてもいる。『フランス言語地図』のような研究は、地政学的にフランスとは立地を異にする日本にはそのまま適用することはできないとするのである（柳田 1943b）。翻って考えると、そうした言語地理学に寄せる大きな期待と自製の思いがあったからこそ、日本が地理的・民族的にフランスとは大きく環境を異にすることが、柳田に「遠方の一致」と周圏分布との連関的解釈を発想させたといえるのではなからうか。



## (2) 言語学との関係——言語地図からの発想——

柳田国男が圏論を地図化するのには1930年『蝸牛考（初版）』の「蝸牛異称分布図」が最初である。しかもそれが日本における民俗地図の始まりでもある。それ以前にはたとえば民俗事象の分布が地図上に落とされることがあっても、それは民俗学の方法論として意識されたものではなく、その意味で民俗地図とは認められない。この「蝸牛異称分布図」により圏構造は視覚化され、圏論は明解な理論として印象づけられることになった。<sup>(19)</sup>

後述するように日本においては言語地図が先行してあったため、「蝸牛異称分布図」は否が応でも二つの側面を持つことになる。一つは、言語地図としての側面、もう一方は民俗地図としての側面である。世界の研究動向をみると、言語学分野においては20世紀初頭に言語地理学が提起され、それとともに多くの言語地図が生み出されてくるが、それとそれほど遠くない時期に日本でも方言研究において分布図が作成されている。それが国語調査委員会による『音韻分布図』（1905年）と『口語法分布図』（1906年）である。その意味において、柳田の描いた「蝸牛異称分布図」は言語地図的側面において世界の動向とほぼ並行するものであったし、民俗地図としては世界においてもっとも先駆的な業績であるといえてよい。<sup>(20)</sup>

ただし、「蝸牛異称分布図」の場合、後に『蝸牛考』が改訂されるとともに柳田自身の手で取り消されてしまうため、1930年時点では民俗学方法論としてはまだ確立したものとはなっていない。つまり、「蝸牛異称分布図」はまだ素描であり習作にすぎず、言語地図から民俗地図へという過渡的な性格を有している。その意味では、「蝸牛異称分布図」の成立に至るプロセスを言語地図との関係から追うことで、民俗地図とはいかなるものなのか、またどのようにして生み出されてきたのかを明らかにすることができる。

『音韻分布図』『口語法分布図』は、国語調査委員会が1900年代初めにおこなった全国規模の調査をもとに作成された音韻と口語法（口語文法）による方言分布図つまり言語地図である（国語調査委員会1905・1906）。

注目すべきは、この日本で最初の本格的な言語地図も「Wave Theory」を日本に紹介した上田万年と大きく関わっていることである。彼を中心として国語調査委員会が組織され、そのもとで言語地図の作成と解析が進められたからである。その意味で、間接的とはいいながら圏論と上田との関わりは、言語学理論「Wave Theory」のみならず、言語地理学およびその表現法としての言語地図においても大きなものがあるといえてよい。

国語調査委員会による調査は、国民国家建設の基盤をなす「標準語」制定を目的にするもので、具体的な調査目標としては日本全域を対象に「言語区域」の確定と「国語変遷」の解明をおこなうことにあった（国語調査委員会1905・1906）。その調査は1904-1905年にかけて2段階に分けて全国で実施された。第1段階では音韻に関して29枚、第2段階においては口語法に関して38枚の言語地図が調査成果として作製されている。

この調査により、日本列島は大きく東（東部方言）と西（西部方言）に「言語区域」が分けられること、およびその境は越中・飛騨・美濃・三河の東境であること、さらにそうした言語区域は日本列島を東西に二分されるような大きなものだけではなく地域単位に小さな言語区域の設定も可能なことなどが初めて実証的に示された。



また、その成果としては、言語区域の設定にとどまらず、「遠方の一致」と類似する現象として「言語ノ島」が指摘されていることは重要である。調査上の不備もあって明確な区域設定はできないとしつつも、「言語ノ島」現象とは西日本の中において特定の方言が飛び離れて東日本のものと同系統であること（つまり西日本の中においては孤立して存在すること）が分布図から読み取れるとされる（文部省 1906）。また、その後も同様の現象は、東条操ら言語学者により明らかにされている（東条 1927a）。

つまり、方言に関して日本列島上の「遠方の一致」への着目は、上田や東条といった言語学者の方が早かったといってよい。しかし、東条らはそうした方言分布上の特徴を指摘はするものの、方言区画論ではその要因について解明できないでいた（東条 1927a）。そうしたとき、柳田は圏論により地域差と時間差を相関させることで、その要因をみごとに解き明かしてみせたといってよい。事の当否はおくとして、当時としては「遠方の一致」の解釈において圏論は方言区画論よりも蓋然性の高い理論であったことは確かである。

次に、口語法の分布図から読み取れることとして、「地理的変遷」の指摘には注目すべきであろう（文部省 1906）。それは、地図上に現れた地理的分布は時代的変遷を反映するというもので、言語地図が地域差を時代差に読み替える方法として認識されていたことを示している。

たとえば、「九州ニハ概シテ古キ形残り」、さらに「九州ニ於ケル云ヒ方ノ、東北若クハ東北言語区域ニ於ケル云ヒ方ト、原形ニ近キモノヲ保存スル点ニ於テ相一致スルコトアリ」（下線、筆者）という。これはまさに、口語文法上の指摘ではあるが、方言においては日本列島において「遠方の一致」が見られ、しかも本州の北端と南端において一致すること、およびそれが「原形ニ近キモノ」であることが主張されている（文部省 1906）。

また、それと同様なことが、後述の方言区画論の立場をとったときにもいえる。1906 年の『口語法分布図』において導き出された東西二大方言対立説は言語学会では柳田が「蝸牛考（論文）」を発表した 1927 年当時においてはほぼ定説となっていた（東条 1927a）。さらに、東条は著作『日本の方言区画』において、日本列島の方言区画を精緻化し、本州東部区、本州中部区、本州西部区、九州区、琉球区の 5 区を設定する言語地図を描いている。それが「大日本方言地図」である（東条 1927b）。このとき注目すべきは、この図に対応して類型間の時代変遷が系統樹として示され、その分岐の順序が明示されたことである。つまり、方言区画論においても、系統樹と合わせ読むことで、圏論でいうところの地域差と時代差との関係を示すことができる。

上記のような言語学における方言研究の進展を柳田が意識しないわけではなく、事実「蝸牛考」においては論文（1927）から初版（1930）そして改訂版（1943）に至るまで一貫して激しく方言区画論を批判するのはそうした背景があつてのことである。つまり、圏論という方法論は、民俗学においては一般理論として提唱されるとともに、当時の言語学を中心とした人文学において強く支持されていた方言区画論に対抗する意図もあつたといえる。

1930 年代後半以降、民俗学の近代学問としての確立期においてさえ、『蝸牛考』の改訂や『方言覚書』の出版にあたり、柳田は自分自身について民俗学者だけではなく、方言学者の側面もあることを認めている（柳田 1943b）。つまり、柳田には方言学と民俗学とを学問として区別する意識はあるものの、圏論はその二つの学問を統合する方法論にしたいという思惑があつたのではなかろうか。少

なくとも圏論の民俗学における一般理論化を志向した時期においては、そうした意図を柳田は有していたといえる。当然、そうした考えを持つ柳田にとって、上記のような1900年代後半から1920年代後半にかけての言語学の研究動向は強く意識される存在であった。

それは、地図に示される日本認識からも指摘できる。民俗地図における日本認識は、言語地図からの援用であるといえる。たとえば、柳田が「蝸牛異称分布図」に用いた日本地図と口語文法を示す言語地図『口語法分布図』に用いられた日本地図とはよく似ている。北は北海道のごく一部（渡島半島）しか含まず、南は沖縄・奄美を除外し、薩南諸島（屋久島・種子島など）までしか含んでいない点はすべて共通する。また、東条の「大日本方言地図」には、琉球列島が先島諸島まで含まれるのに対して北海道は除外されており、その後の民俗学の対象としての日本認識にも大きな影響を与えている（安室2018）。

つまり、柳田にとって民俗学が対象とする地理的範囲は言語（国語）で規定されるものを基本としていたといえる。言い換えれば、言語学上「日本語」が使われる領域がそのまま民俗学の対象範囲ということになる。

以上のように、柳田の圏論およびその表現法としての民俗地図は言語学における当時の研究動向と密接に関わっており、民俗の分布を図化することで何らかの法則性を発見するという手法は、言語学における言語地図と直接的な関係を持って提起されてきたといえる。

### （3）圏論と方言区画論批判——方言研究に対する姿勢の違い——

方言分布図としては、柳田国男の「蝸牛異称分布図」に先行して、言語学分野において1900年代に『音韻分布図』『口語法分布図』という言語地図が描かれていたことは前述の通りである。方言研究において、前者（「蝸牛異称分布図」）は語彙に、後者（『音韻分布図』『口語法分布図』）は音韻と文法に注目するという違いはあるが、方言を類型化し、その分布を日本地図上に描き出すことについては共通する。柳田の民俗分布図（民俗地図）は方言圏という考え方を媒介にして言語学の方言分布図（言語地図）の影響のもと成立したと考えるべきである。<sup>(21)</sup>

柳田の方法を仮に民俗学的方言研究とするなら、言語学者による方言研究との違いを明瞭に示すのは、その方言研究が語彙に特化したものであった点にある。通常、言語学者による方言研究では、語彙だけでなく、文法、アクセント、音韻にも目が向けられ、それらを総合する形で研究がおこなわれてはならないとされる（例、東条1950）。しかし、柳田の方言研究はそうした総合的な分析視点を持つことはなかった。その意味で、言語学から見れば柳田の方言研究は偏りの大きなものであったといわざるを得ない。<sup>(22)</sup> 言い換えれば、それが民俗学における方言研究の特徴である。

さらにいえば、柳田の場合、語彙の中でも実際に取り上げられるのは異音同義語（シノニム）が主であった。同音異義語（ホモニム）に対する関心は限定的であったといわざるを得ない。蝸牛の同義語に注目する「蝸牛異称分布図」はまさにその典型である。『蝸牛考（初版）』ではナメクジが取り上げられ圏論を説く上で重要な役割を担っているが、それはあくまで蝸牛の異称として取り上げられているにすぎない。考察の一部に、殻を持つ蛞蝓が蝸牛であるとして、常民の動物認識のあり方として蝸牛と蛞蝓とが未分化であった時代について言及するが、やはりその視点は限定的で蝸牛のシノニム分析に主体があることに変わりはない（柳田1930b）。

この点は同じ民俗学者でも、シノニムに加え、ホモニムにも注目した渋沢敬三による魚名研究との大きな違いである（安室 2016）。その意味で、シノニムへのこだわりは柳田の民俗分布論の一つの大きな特徴であるといえる。

柳田が方言研究において語彙（中でもシノニム）にこだわったのは、それがあくまで民俗学のためのものであり、その分析手法を他の民俗事象にも繋げる意図を持っていたからである。そうした方言（語彙）研究を軸とした民俗の総合化の意図は 1935 年『郷土生活の研究法』においてより鮮明となる。その意味で、方言（語彙）への執着は、民俗学における総合化の第一歩にほかならない。

そう考えると、柳田を単純な語彙主義者として批判してしまうのは誤りである。そうした柳田の姿勢は、言語学との間で方言研究をめぐる一つの大きな論争を生み出すことになる。具体的には方言区画論と周圏論との関係をめぐる議論である。

民俗学理論として周圏論が柳田により提示された 1935 年前後、柳田による批判の矢面に立つことになる言語学者が東条操である。<sup>(23)</sup>柳田が周圏論と方言区画論との関係を「必ずどちらかの一つに決しなければならぬ」（柳田 1938）とするのに対して、東条は両論の関係を「世間で往々誤解するやうに互に相容れないものではない」「同時に併存し得て矛盾しない二つの学説」と主張する（東条 1950）。

一方で、東条は、両者の違いを、方言区画論が語彙のみならず、発音や語法といったものを総合する「言語体系全体」を対象としているのに対して、周圏論は「単語」であり「俚言」に注目してなされたものであるとする（東条 1950）。つまり、両論は同じ「方言」を対象とするものでありながら、その意味するところが大きく異なっているのである。その上で、方言研究は言語体系全体を問うような総合的な視点を持っておこなわれるべきであり、柳田の方言研究は「俚言の研究」とすべきであると主張する。<sup>(24)</sup>そうした批判は調査法にもおよび、民俗学者のおこなっている方言調査は「俚言調査」にすぎないとする。

東条の主張は、至極まっとうな批判であり、民俗学における方言研究のあり方を言い当てている。また、それは方言研究がいかにあるべきかというにとどまらず、民俗学がどのような学問であるかについても、柳田と東条では異なる見解を持っていたことを示している。

そのとき注意すべきは、柳田は周圏論の定立過程において言語学から多くを学んだ上で、方言区画論に批判を加えていることである。柳田は東条の方言研究との違いについて「方言領域」と「方言区画」という言葉の使い分けで応じている。柳田は語彙に注目して方言の分布域を示すときには「方言領域」という用語を使い、音韻・アクセント・文法を加味した概念である「方言区域」（「方言区画」と同意義）とは明確に区別していた。つまり、方言の分布域を示すとき、柳田が進める民俗学的方言研究では「方言領域」を、言語学者の方言研究については「方言区域」を用いていた。

その上で、「方言区域」は領域設定が固定的であるのに対し、「方言領域」は時代により変化するものとした（柳田 1930b）。柳田の場合、実はその点が方言区画論への最大の批判点となっている（柳田 1928b）。時とともに分布領域が変化することは、「遠方の一致」を説明するため、地域差を時代差に読み替える理論として柳田が考えた周圏論の本領といってよい。つまるところ、柳田は周圏論により言語学とは異なった方向での総合化、つまり言語現象にとどまらず民俗事象一般を対象化することを考えていた。

そのように方言区画論への批判は、1927 年「蝸牛考（論文）」以降、1943 年『蝸牛考（改訂版）』

に至るまで、周圈論の民俗学研究法としての輪郭が明確になるにしたがって強くなっていった。そして、それは柳田にとっては民俗学を近代学問として定立してゆく時期と重なる。つまり柳田は東条ら言語学者とは同じ方言学・方言研究という言葉を使っているとしてもその最終目的がまったく異なっていたのである。柳田にとっては、たとえ一部でも方言区画論を容認することは自らの方言研究を否定することになるし、それは同時に柳田の考える民俗学の否定にも繋がると考えたのであろう。<sup>(25)</sup>

なお、前述のように、1940年代になると『蝸牛考』の改訂版(1943)から「蝸牛異称分布図」が削除されることに象徴されるように、周圈論をして民俗学の一般理論とする試みは結局のところ失敗し、『郷土生活の研究法』で掲げたその目論見は頓挫した。『蝸牛考』改訂のおり、民俗学方法論として理論化すること(言い換えると、語彙だけでなく研究対象に他の民俗事象を取り込むこと)を諦めたのである。その結果、1943年の『蝸牛考』改訂に際して周圈論のような方言(語彙)研究法を民俗学理論ではなく方言学(言語学)の方法とすることに大きく舵を切ったといっていよい。

#### IV. 言語地図から民俗地図へ——まとめに代えて——

##### (1) 周圈論の定立に向けた第1ステップ——沖縄から日本全国へ——

「Wave Theory」から周圈論へ、つまり言語学理論から民俗学にオリジナルな一般理論へと創意される上で、二つの大きなステップがあったことは前述の通りである。簡単にいうと、第1のステップは日本全体を一元的に捉えられるようにすることであり、第2のステップがその適用範囲を方言(語彙)から民俗事象一般に拡大することであった。

第1のステップは、1927年の「蝸牛考(論文)」と1930年『蝸牛考(初版)』との間にあり、そこが言語学理論から民俗学理論への大きな転換点の一つとなっている。つまり、同じ「蝸牛考」と名付けられた論考ではあるが、前者で提示された「周圈説」はまだ「Wave Theory」といった言語学理論を援用した仮説の提示にとどまっている。それに対して、後者になると、沖縄の位置づけには迷いがあるものの、「遠方の一致」を用いて日本列島全体を、近畿を中心に一元的に把握することを可能にした。それは「周圈論」を民俗学にオリジナルな理論とする第一歩にはかならない。その第一歩を可能にしたのが、柳田国男が全国規模でおこなった動植物名彙に関するアンケート調査であり、さらにいえばその成果をもとにした民俗地図の作成であった。ただし、この時点では地図化された民俗分布は方言しかも語彙に限られている。

第1のステップに関連していうと、柳田は「蝸牛考(論文)」が書かれる2年前の1925年時点において、すでに沖縄における言語変化が「最も適切に日本全体の言語変遷の歴史を縮図するもの」と捉えていた(柳田1925c)。つまり、全国規模のアンケートによって周圈論が日本全体に適用可能なものかどうかを実証するより前に、まずは琉球列島において首里を中心とした民俗文化の周圈構造を実感していたといっていよい。そうした実感は沖縄・奄美旅行により得られたものであったと考えられる。

「Wave Theory」は、言語接触の理論として複数の文化圏の存在を前提にするものであり、その意味でシュミットの理論に忠実に依拠するなら、沖縄に関しては近畿中心の文化圏とは別個のものとして捉えること、つまり一つの中心から発する同心円ではなく、中心が二つある波動の接触と捉える方がむしろ本来であった。しかし、柳田はそのようにはシュミットの「Wave Theory」を用いず、む



しろ上田万年の「波動説」の解釈に従うかたちで、あくまで近畿文化圏に沖縄を含めるものとし、当然周圏論もその方向で理論化を進めた。

翻っていえば、そのことが沖縄の位置づけに『蝸牛考（初版）』以降悩まされる原因となったといえてよい。そうした矛盾を解決するのは、実は柳田がもっとも力を入れて調査分析に努めた蝸牛方言ではなく、アンケートの項目にも入っていない蜻蛉<sup>とんぼ</sup>であったことは皮肉である（柳田 1947）。これによりやっと沖縄まで含めて日本を一元的に捉えることが可能となった。ただ、それと引き替えに、次に述べる第2ステップへと進んで10年もしないうちに、柳田は『蝸牛考（改訂版）』において周圏論の一般理論化を諦めてしまう。結果、周圏論を民俗事象一般へ適用することを諦め、その対象を方言（語彙）に限定してしまったのである（安室 2018）。

## （2）周圏論の定立に向けた第2ステップ——言語地図から民俗地図へ——

前章まで、おもに言語学の研究動向との関わりから、伊波普猷を筆頭に上田万年や東条操といった言語学者に焦点を当て、周圏論が成立するまでのプロセスを検討してきた。それは着想から第1のステップに至るまでを説明するものであるといえてよい。しかし、こうした言語学との関わりからだけでは、第2のステップは説明できない。

それは、第2のステップとは、方言（語彙）だけでなく民俗事象一般にも適用可能な理論として周圏論が位置づけられなくてはならないからである。第2ステップに進んだことが明確に示されるのが1935年の『郷土生活の研究法』である。同書は民俗学が近代学問として整備されるとき必要不可欠な方法論書として位置づけられる。つまり、柳田にとって周圏論の民俗学における一般理論化は民俗学が近代学問として認められるには欠くことのできない要件であったといえよう。

前述の通り、言語学からの影響を受けながらも、ときにはその動向を先導しつつ、柳田は周圏論の定立に向けて歩んできた。そうした言語学との関係を離れ、第2のステップに進もうとするとき、フィンランド学派なかでもカールレ・クローン<sup>(26)</sup>の存在は大きな意味を持っている。それは単なる言語の問題を超え、口承文芸の分野にまで周圏論の対象を拡張させる可能性を秘めていたからである。

1890年代になる、民俗学において伝承の分布状況をもとに考察する研究手法は、すでにヨーロッパとくにフィンランドの昔話研究で実践されていた。その代表が、カールレ・クローンの父親ユリウス・クローンの動物昔話の研究である（クローン 1926）。そうした口承文芸に関する「地理的研究法」は、1926年にカールレ・クローンがドイツ語で書いた『民俗学研究法』により日本に知られることになる。そのきっかけを作ったのはやはり柳田国男である。

柳田は出版されてわずか5年後の1931年には原書でそれを読んでいる（小田 2019）。そして、さらにその9年後には関敬吾による翻訳書『民俗学方法論』（クローン〔関訳〕1940）が日本において出版されるが、その翻訳に関に強く勧めたのは柳田であったという（関 1940、小田 2019）。このことは、翻訳出版との時期的符合を考えると、本書が日本の民俗学を近代学問として定立する上で重要な意味を持つとの認識を柳田が持っていたことの証しとなる<sup>(26)</sup>。

クローン著『民俗学方法論』をもとに、もう少し具体的に、本書が周圏論における第2のステップに与えた影響についてみてゆく。

クローンは国際的な伝承地の広がりを持つ昔話を例にして、伝播の距離と伝承の変質の関係につい



て次のようにいう。「変化の地理的連鎖」には「進んだ路が長ければ長いだけ、いろいろな変形を起させた障碍が多くなる」(クロン 1926 : p 76) と同時に「歌謡や物語の伝播の一般的方向を知るならば、或る歌謡が移動の出発点で忘れられるといふ想像は、個々の場合に於て比較的確かになる」(同 : p 86)、また「(伝承の) 出発点から遥かに離れてゐる場所に、個々の特徴の出発点に近い地域の形式よりも古い形式が、ときどき現はれうる」(同 : p 127)。

さらに、クロンは、伝承範囲の広狭とその伝承が成立した時代との関係を次のようにいう。「同じ物語が、広く伝播してゐる昔話の形式と狭い範囲に限られた歌謡の形式とで見出されるときは、年代の先位は絶対的に前者にあると認めなければならない」(同 : p 207)。つまり、これは古くに成立した伝承ほど広い範囲に分布することをいっている。

そうしたクロンの考え方をもとに、それを細長い日本列島上のできごとに置き換えるなら、昔話や歌謡といった口承文芸は伝承の発信地から離れたところのもののほど古態を残し、かつそれは出発点を挟んで離れたところに「遠方の一致」を示すということになる。

ただし、ここであらためて述べておかななくてはならないのは、柳田はクロンの原著が出版された 1926 年当時にはすでに方言については上記のような考え方が成り立つことを沖縄・奄美旅行とヨーロッパ赴任の中で体得していたことである。前述のように、1925 年の論文「南島研究の現状」において「文化波動の法則」を挙げていることを見てもそれはうなずけよう。まだ実証の段階には至ってはいないが、このときの「文化」には方言だけでなく民俗事象一般も含まれていると考えて間違いない。

問題はカールレ・クロンがこうした周圏論に繋がる発想を、言語(方言)ではなく、昔話や歌謡といった口承文芸において論じたことである。これにより、柳田は周圏論の対象を民俗事象一般に拡大すること、つまり第 2 ステップに進むことについて確信を得ることができたといつてよい。クロンと柳田のどちらがその着想を先に持ち得たかはわからないが、後に柳田がクロンの原著の翻訳を強く関に勧めたのは、自分が提唱した周圏論を第 2 ステップに押し上げるにはそれが有効であると認めたからにほかならない。

日本でもっとも早く作られた民俗地図は柳田国男の「蝸牛異称分布図」(1930 年)であることは前述のとおりである。この図を作るためのアンケート調査がおこなわれたのが 1927 年であることを考えると、民俗地図を民俗学の研究方法として位置づける考え方は世界の先端を行っていたといつてよい。

ヨーロッパとくにドイツの民俗地図研究の動向に詳しいヨーゼフ・クライナーは、火焚き行事を例にあげ、世界でもっとも早くに計画された民俗地図作成のための予備調査がドイツでおこなわれたのは 1926 年頃のこと、さらにドイツにとどまらずヨーロッパ全域を視野に入れた民俗地図が計画されるのは 1930 年代に入ってからのことであるとする(クライナー 1982)。これは柳田が言語地図から民俗地図を創意する時期とほぼ一致しており、民俗地図に限っていえば柳田は世界の潮流を先導する研究者の一人であったといつてよい。

周圏論を方言(語彙)だけでなく民俗事象一般にも適用可能なものにしたことは、民俗学史から見ると言語地図からの完全な脱却を意味し、ここに方法論としての民俗地図が出発したといえる。ただし、周圏論を明確なかたちで示すために民俗地図は有効に機能するが、反対は成り立たないことは注意すべきである。つまり、方法論としての民俗地図は周圏論のためだけのものではない。たとえば、

1951 年『民俗学辞典』において、海女や両墓制の分布を地図化し、十日夜・亥子の分布図では語彙の分布とともに藁筒で地面をたたく習俗の分布も一枚の地図の中に併記している（民俗学研究所 1951）が、ここに至ると柳田においてさえ、たとえば言葉の上で「遠方の一致」が見いだされても、その説明に周圏論が用いられることはなくなっている。

以上、民俗事象の分布を図化するという民俗地図の発想のもと、周圏論と同様、言語地図にあったことは疑いようがないが、それは民俗学を近代学問として打ち立てようという目的のもと、柳田の創意により民俗学方法論の一つとなったといっていよい。その意味で、周圏論は民俗地図研究における解釈法の一つにすぎない。

## 注

- (1) 本稿では 1935 年をもって民俗学の近代学問としての成立とする。それは、本稿でも注目する日本で初めての民俗学方法論書である『郷土生活の研究法』と民俗学の研究者団体となる「民間伝承の会」の成立年を指標とした。もう一つの方法論書『民間伝承論』（柳田 1934e）は 1934 年刊行であるが、民俗学独自の方法論として本稿で注目する周圏論の確立は『郷土生活の研究法』にあること、および「民間伝承の会」により研究者の組織化が図られたことを重視し、近代学問としての成立を 1935 年とした。
- (2) 周圏論の図化に関しては、ドイツの経済学者ヨハン・ハインリヒ・フォン・チューネンの著作『孤立国』（1826）からの影響が指摘されることは多い（例、千葉 1966、平山 1969）。都市を中心に同心円的に配置される土地利用の違いを示す農業立地モデルが柳田の周圏論に影響を与えたと柳田自身が述べている（千葉 1966）とされるが、それは福田アジオも指摘（福田 1969）するようにあくまで市場と産地および輸送コスト・市場価格との関係を描く経済モデルである。それは柳田の周圏論とはまったく別物とすべきであり、あえていうなら都市を中心にした同心円モデルという図式（表現法）が類似するにすぎない。その意味でこれを柳田のすぐれて実証的な民俗分布の解読法であり、かつ地域差を時間差に読み替えるための理論の出発点とすることはできない。
- (3) 柳田国男の周圏論を、フランスの言語地理学やフィンランド学派との関係とは別の視点から、19-20 世紀のヨーロッパにおいて人文学の中で中心的位置を占めていた文献学とくに比較文献学の系譜に位置づけようとする研究（岩竹 1999）があり注目される。ただ本稿の目的は、柳田の発想法とヨーロッパにおける人文学との関係を知ることではない。また、そこまで抽象度を高めてしまうとかえって柳田の周圏論はその研究方法としての独自性が失われてしまい、その結果民俗学に導入される経緯をたどることができなくなってしまうと考える。
- (4) 「遠方の一致」は 1935 年の『郷土生活の研究法』で提起された概念であるが、1927 年に発表された「蝸牛考（論文）」では同意義で「聯絡無き一致」という言い方をしている。
- (5) 山村調査は、全国 66 か所におよぶ山村に調査者が「採集手帳」を携えて直接調査に訪れておこなわれたもの（柳田編 1937）で、1927 年に柳田がおこなった動植物名に関するアンケート調査に比べるとはるかに高いデータの質を持っている。具体的には、アンケート調査では方言（語彙）に限定せざるをえなかったが、調査者が調査対象の村を訪れてなされる山村調査では成果としていわゆる民俗誌データを得ることができた。後に東条操により語彙だけを抽出した調査のあり方を批判される（東条 1950）ことになるが、すでに柳田はそのことを自覚しており、そうした批判に対抗すべく民俗誌調査のあり方を示したといえよう。
- (6) 動植物名と挨拶文に関する 32 項目のアンケートは、学校を中心に全国約 1000 か所（回答数約 600）に、「東京朝日新聞社 柳田国男」の名前で送付されている（柳田 1948）。
- (7) 「海南小記」は 1921 年 3 月から 5 月にかけて朝日新聞に全 32 回にわたって連載された紀行文である。32 回のうち 5 月に入ってからのはヨーロッパに向けて出港後の発表ということになるが、おそらくその分も出港前に執筆入稿していたものと思われる。

- (8) 『蝸牛考(初版)』が出版される前の1920年代後半という時期を考えると、「文化波動の法則」や「周圏波動の法則」は「Wave Theory」(波動説)の援用である可能性は高い。
- (9) 従来、『海南小記』(1940)は柳田国男にとって「海上の道」論を集大成する『海上の道』(1961)の先駆けになる著作といわれている。その意味で、沖縄・奄美旅行は「海上の道」論発想の原点となっている。筆者はそうした議論を否定するわけではないが、両書には沖縄の扱いにおいて相反するものがあり単純に『海上の道』を『海南小記』の延長線上に位置づけることはできない(安室2018)。沖縄・奄美旅行はむしろ柳田にとってはその直後のヨーロッパ赴任と併せて、周圏論という日本民俗学にとって近代学問としての成立に必要不可欠な学説を形成する上で大きな意味を持っていたと考える。
- (10) 伊波普猷は柳田国男に促されて『古琉球(第3版)』を東京の出版社より刊行し、1925年には沖縄県立図書館館長の職を辞して上京する。その後も、柳田は伊波らと1925年に「おもろさうし」の研究会、1927年には南島談話会を組織するなど、伊波と柳田との関係は密なものがあつた。その時期を境に、伊波は「南島」の用語を多用するようになり(松並2010)、たとえばそれまで「琉球人」(伊波1911c)といていたものが「南島人」(伊波1926)と表記されるようになってゆく。この点は、1930年代に入り柳田が日本民俗学を近代学問として確立しようとするとき周圏論をもって沖縄を日本の辺境(南島)に位置づけることと重なっている。
- (11) 伊波普猷における汎日本的レベルでの音韻分布の考察は、言語学の恩師である上田万年の講義(新村1975)や同著の論考「P音考」(上田1898)の影響が大きいと考えられる。
- (12) 柳田国男は『郷土生活の研究法』の中では「周圏論」の用語は用いておらず、「遠方の一致」の一節を設けて、その内容を解説している。つまり、同書では、「遠方の一致」が周圏論の代名詞となっている。柳田は、民俗事象一般にも適用できるとしたことで、周圏論という言語学理論をイメージさせる用語をあえて避けたと思われる。
- (13) 上田万年については、当時学生であった新村出により筆録された1896・1897年度の講義ノートが遺されており、そこにはすでに「P音考」と同様の考えが示されている(新村1975:p239-240)。
- (14) チェンバレンは1873年にイギリスから御雇外国人として来日し、1886年から東京帝国大学で言語学の教授を務めた。指導した学生の一人に上田万年がいる。琉球語やアイヌ語の研究で知られ、とくに琉球語については日本語との関係について研究の基礎を築いたとされ、柳田もその偉業を讃えている(柳田1925a)。また、柳田はジュネーブ滞在中にそこでひっそりと余生を送るチェンバレンを訪ねようか逡巡し、果たせぬまま1冊のチェンバレンの書き込みのある著作を古書店で入手して日本に持ち帰ったことを『海南小記』の序の中で書いている(柳田1925a)。
- (15) 論文「琉球群島の単語」に取り上げられた単語は70語(「P音考」では19語)におよび、首里・国頭・八重山・宮古・大島(奄美)という5地域の比較は「P音考」と共通している。その結果、「pfnの音を見るに首里語と大島語とはfよりhに遷つる過渡の時代にあることがわかり、国頭および宮古八重山のことは殆んどpである」(伊波1904)というように「P音考」の元となる分析結果を示している。
- (16) 新村出は東京帝国大学において伊波普猷と同様、上田万年の指導を受けた言語学者である。柳田との関係は深く、言語学上の影響も予想される。たとえば、柳田はヨーロッパ赴任の航路においてニューヨークのホテルで同室になったり、途中帰国の折フランスからの航路で同船になったりしたことを「仲良しの新村出と一緒にあった」と妻宛に手紙を送っている(小田2019)。さらに注目すべきは、柳田が主催者の一人である南島談話会には上田万年や伊波普猷とともに初回(1922年4月)から参加していることである(小田2019)。ただ、本稿では柳田が周圏論発想の折に新村から受けた影響については、その可能性を指摘するにとどめる。
- (17) 上田万年の講義ノートには図3に近いもの(新村1975:p241)も載せられており、シュミットの「Wave Theory」本来の主張も紹介されている。
- (18) ABA分布の用語は言語学において周圏論を説明するときに用いられることが多い。Aという言葉の広がりの中に、Bが後に発生すると、Bの拡大とともにAが分断されて、ABAという並びの分布になり、結

- 果的に A の分布は柳田がいうところの「遠方の一致」として認められるようになるとするものである。
- (19) 「蝸牛異称分布図」からは実のところ 5 重の同心円構造を読み取ることはできない（大西 2016・安室 2016）。『蝸牛考（初版）』においては、実際は文章のレトリックによりあたかも圏論が成り立つかのよう主張されたといつてよい（安室 2016）。
- (20) 1950 年代まで日本には地図を用いて言語史を再構成するような言語地理的研究は存在しなかったとされる（城生 2015）。それを考えると、1930 年刊行の『蝸牛考（初版）』は言語学・民俗学の両学問にとって研究史上突出して先駆的であったといつてよい。
- (21) 柳田は「民俗地図」ないし「民俗分布図」という用語を用いたことはない。それに対して、「方言地図」は用いている。1928 年「玉蜀黍と蕃椒」の中で、その言葉を使い、日本列島上のトウモロコシおよびトウガラシの異称分布を論じている。柳田の言う「方言地図」とは、その後の使用例（『蝸牛考』など）を見る限り、明らかに異音同義語（シノニム）の分布を示したもの、つまり「異称分布図」と同義である。
- (22) 柳田国男は音韻やアクセントに注目した方言研究を否定しているわけではない。伊波普猷の「P 音考」を高く評価し、「全国方言記録計画」（柳田 年不詳）にあるように、調査の段階では、音韻に関しても記録する必要性を示している。たとえば、「妖怪古意」（柳田 1934b）のように言語と民俗との関わりを論じる論考では、妖怪を意味する方言についてアクセントの変遷についてこだわっている。
- (23) 東条操は伊波普猷と同様に東京帝国大学で上田万年から指導を受けた言語学者で、日本における方言学の開拓者とされる。東条の「方言採集手帖」による調査データを利用（柳田 1931）したり、1931 年にはともに研究誌『方言』の創刊に関わったりするなど、柳田との接点も多かった。
- (24) 柳田国男はヨーロッパ滞在中に出版されたばかりのアルベール・ドーザ『言語地理学』に接しているが、同書には言語地理学が「俚語の研究から出発したものである」（ドーザ 1922）とされており、圏論を理論化するときその発想の起点の一つに当時のフランスで起こった言語地理学があった以上、俚語に特化して柳田が圏論を考案したのはある意味必然であったといえよう。
- (25) 柳田は当初、方言区画論を全否定していたわけではなく、音韻分析の必要性については認めていた。つまり、「方言の区域を画定することは……中略……音韻の変化に於ては大よそ明白に、地方的の差異が認められる」（柳田 1928a・1930b）というように、最初は語彙分析を主とする圏論との棲み分けを考えていた感がある。
- (26) 柳田国男はクローンの『民俗学研究法』には厳しい評価を与えており、「それは計画であり又抱負であって、まだ具体的な手本を示すまでには至って居ない」としている（柳田 1935c）。柳田は、1927 年の論考「目一つ五郎考」（柳田 1927b）において、伝説の中に「遠方の一致」を見いだしていることからすると、圏論を口承文芸に適用するという着想は柳田としては自分の方が早かったという自負心があるのかもしれない。

## 引用参考文献

〈柳田国男〉＊（定本□）は『定本柳田国男集』（筑摩書房）のことで、□数字は巻数を示す。また、年号の後の abc は同年において月日の早い順を示す。

- ・柳田国男 1909 『後狩詞記』 自家出版（定本 27）
- ・柳田国男 1921a 「阿遅摩佐の島」（『海南小記』所収）（定本 1）
- ・柳田国男 1921b 「海南小記（1-25）」（『海南小記』所収）（定本 1）
- ・柳田国男 1921c 「与那国島の女たち」（原題「与那国噺」、『海南小記』所収）（定本 1）
- ・柳田国男 1922 「南の島の清水」（『海南小記』所収）（定本 1）
- ・柳田国男 1923 「猪垣の此方」（『海南小記』所収）（定本 1）
- ・柳田国男 1925a 『海南小記』 大岡山書店



- ・柳田国男 1925b 「付記」『海南小記』（定本 1）
- ・柳田国男 1925c 「南島研究の現状」（『青年と学問』所収）（定本 25）
- ・柳田国男 1927a 「蝸牛考（論文）」『人類学雑誌』42-4～7
- ・柳田国男 1927b 「目一つ五郎考」『民族』3-1（『一目小僧その他』所収）（定本 5）
- ・柳田国男 1928a 「玉蜀黍と蕃椒」（『方言覚書』所収）（定本 18）
- ・柳田国男 1928b 「虎杖及び土筆」（『野草雑記』所収）（定本 22）
- ・柳田国男 1929 「シンガラ考」（原題「チギリコッコ考」、『小さき者の声』所収）（定本 20）
- ・柳田国男 1930a 「東北と郷土研究」（原題「東北の土俗」）（定本 25）
- ・柳田国男 1930b 『蝸牛考（初版）』 刀江書院
- ・柳田国男 1930c 「序」『蝸牛考（初版）』
- ・柳田国男 1930d 「物の名と知識」『蝸牛考（初版）』
- ・柳田国男 1930e 「四つの事実」『蝸牛考（初版）』
- ・柳田国男 1931 「『南佐久郡方言集』序」（『方言覚書』所収）（定本 18）
- ・柳田国男 1932 「『宝島方言集』序」（『方言覚書』所収）（定本 18）
- ・柳田国男 1934a 「『豊後方言集 2』序」（『方言覚書』所収）（定本 18）
- ・柳田国男 1934b 「妖怪古意」（『妖怪談義』所収）（定本 4）
- ・柳田国男 1934c 「国語史論」（定本 29）
- ・柳田国男 1934d 「新語論」（『国語史新語篇』所収）（定本 18）
- ・柳田国男 1934e 『民間伝承論』 共立社（定本 25）
- ・柳田国男 1935a 「島袋盛敏訳『遺老説伝』序」（『老読書歴』所収）（定本 23）
- ・柳田国男 1935b 『郷土生活の研究法』 刀江書院（定本 25）
- ・柳田国男 1935c 「フィンランドの学問」『菱華』134 号（定本 30）
- ・柳田国男編 1937 『山村生活の研究』 民間伝承の会
- ・柳田国男 1938 「東条操著『方言と方言学』書評」（『老読書歴』所収）（定本 23）
- ・柳田国男 1940 『海南小記』 創元社（定本 1）
- ・柳田国男 1943a 『蝸牛考（改訂版）』 創元社（定本 18）
- ・柳田国男 1943b 「序」『蝸牛考（改訂版）』（定本 18）
- ・柳田国男 1947 「赤とんぼの話」（『少年と国語』所収）（定本 20）
- ・柳田国男 1948 『西は何方』 甲文社（定本 19）
- ・柳田国男 1949 「海村調査の前途」柳田国男編『海村生活の研究』 日本民俗学会
- ・柳田国男 1961 『海上の道』 筑摩書房（定本 1）
- ・柳田国男 1962 「序文」『伊波普猷選集 中巻』 沖縄タイムス社
- ・柳田国男 年不詳 「全国方言記録計画」『序跋集』（定本 30）

〈柳田国男以外〉

- ・アルベール・ドーザ 1922 『言語地理学』（松原秀治・横山紀伊子共訳 1958 訳書『フランス言語地理学』大学書林）
- ・伊波普猷 1904 「琉球群島の単語」『東京人類学会雑誌』20 卷 3 号（『伊波普猷全集第 8 巻』所収）
- ・伊波普猷 1911a 『古琉球（初版）』 沖縄公論社
- ・伊波普猷 1911b 「P 音考」『古琉球（初版）』 沖縄公論社＊1907 年、執筆
- ・伊波普猷 1911c 「琉球人の祖先に就いて」『古琉球（初版）』 沖縄公論社
- ・伊波普猷 1922a 『古琉球（第 3 版）』 郷土出版社
- ・伊波普猷 1922b 「序」『古琉球（第 3 版）』 郷土出版社
- ・伊波普猷 1926 『琉球古今記』 刀江書院

- ・岩竹美加子 1999 「『重出立証法』・『方言周圏論』再考」『未来』1999年9・10・12月号
- ・上田万年 1898 「P音考」『帝国文学』4巻1号 帝国文学会
- ・大西拓一郎 2016 『ことばの地理学』大修館書店
- ・小田富英編 2019 「年譜」『柳田国男全集 別巻1』筑摩書房
- ・カールレ・クローン 『民俗学方法論』（翻訳：関敬吾、1940、岩波書店）
- ・国語調査委員会 1905 『音韻調査報告書』日本書籍（復刻版、国書刊行会、1986）
- ・国語調査委員会 1906 『口語法調査報告書 上・下』国定教科書共同販売所（復刻版、国書刊行会、1986）
- ・後藤総一郎 1996 「柳田国男のジュネーブ体験」柳田国男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書房
- ・柴田武 1975 「序文」新村出筆録『上田万年 言語学』教育出版
- ・柴田武 1980 「解説」柳田国男『蝸牛考』（岩波文庫版）岩波書店
- ・新村出筆録、柴田武校訂、上田万年講述 1975 『上田万年 言語学』教育出版
- ・ジュール・ジリエロン編 1902-1910 『フランス言語地図（Atlas Linguistique de la France）』
- ・城生佰太郎 2015 「実験言語学序説」『実験音声学・言語学研究』7号 日本実験言語学会
- ・関敬吾 1940 「あとがき」カールレ・クローン『民俗学方法論』岩波書店
- ・高藤武馬 1983 「柳田国男と方言研究」『民俗学研究紀要』7号 成城大学民俗学研究所
- ・千葉徳爾 1966 『民俗と地域形成』風間書房
- ・定本柳田国男集編纂委員会 1971 「年譜」『定本柳田国男集別巻第5巻』（定本別5）
- ・東条操 1927a 『国語の方言区画』東京堂出版
- ・東条操 1927b 「大日本方言地図」（『国語の方言区画』付属）
- ・東条操 1950 「方言周圏論と方言区画論」『国語学』4輯 国語学会
- ・並松信久 2010 「伊波普猷と『沖縄学』の形成」『京都産業大学論集 人文科学系列42』京都産業大学
- ・平山和彦 1969 「周圏論をめぐる諸問題」『日本民俗学会報』60号 日本民俗学会
- ・福田アジオ 1969 「周圏論の歴史」『日本民俗学会報』60号 日本民俗学会
- ・福田アジオ 1984 「方言周圏論と民俗学」『日本民俗学方法序説』弘文堂
- ・外間守善・比屋根照夫 1976 「年譜」『伊波普猷全集第11巻』平凡社
- ・松浪有・池上嘉彦・今井邦彦編 1983 『大修館英語学辞典』大修館書店
- ・松原秀治 1958 「旧版解説」ドーザ『フランス言語地理学』大学書林
- ・民俗学研究所編（柳田国男監修）1951 『民俗学辞典』東京堂出版
- ・民俗学研究所編（柳田国男監修）1953 『年中行事図説』岩崎書店
- ・本居宣長 1812 『玉勝間』（『本居宣長——日本思想大系40』、1978、岩波書店）
- ・文部省 1906 『口語法調査報告書 上』国定教科書共同販売所
- ・安室知 2016 「蝸牛と魚——周圏論の図化をめぐる、柳田国男と渋沢敬三——」『日本民俗学』288号 日本民俗学会
- ・安室知 2018 「柳田国男が描く日本地図——消される北海道、揺れる沖縄——」『歴史と民俗』34号 神奈川大学日本常民文化研究所
- ・ヨーゼフ・クライナー 1982 「火焚き行事とヨーロッパ民俗学」『月刊文化財』1982年7月号 文化庁文化財部
- ・ヨハン・ハインリヒ・フォン・チューネン 1826 『孤立国』（訳書『孤立国』近藤康男・熊代幸雄共訳、日本経済評論社、1989）
- ・Lehmann, W.P 1962 Historical Linguistics: An Introduction. New York（松浪有訳『歴史言語学序説』研究社出版、1967）
- ・Johannes Schmidt 1872 Die Verwandtschaftsverhältnisse der indogermanischen Sprachen. Weimar: Bohlau（『インド・ゲルマン諸語の関係』）